

'95. 1. 17 阪神・淡路大震災
西宮市消防団員の活動記録集

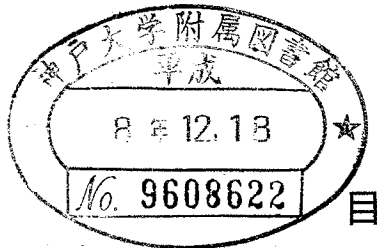


西宮市消防団

震災文庫

5

218



目次

00096086226

はじめに

1 大震災に直面して

消防団長 木 嶋 巖 1

2 1月17日の1日

副団長 吉 井 潔 3

3 阪神大震災の体験

副団長 松 本 光 央 5

4 私の長い一日

副団長 八 車 典 雄 6

5 1月17日の行動

副団長 吉 田 昭 光 7

6 阪神大震災について

理 事 田 中 一 郎 8

7 西宮市消防団の1月17日

消防局消防課長 岸 本 正 8

8 私の1月17日

用海分団長 尾 山 一 男 12

9 その時私は

上ヶ原分団長 山 田 實 13

10 大地震の

高木分団長 古 塚 貞 雄 15

11 平成7年1月17日を振り返って

上甲子園分団長 茂 木 清 16

12 地震体験記

鳴尾中分団長 喜 田 利 竹 17

13 阪神大震災を振り返って

鳴尾北分団長 井 上 義 夫 18

14 1月17日午前5時46分

鳴尾西分団長 石 野 吉 英 19

15 阪神大震災に思う

名来分団長 木 田 佳 文 19

16 防災活動日記

上山口分団長 上 谷 良 一 21

17 遠い夢

中野分団長 北 浦 治 23

18	ヘルメットと法被					
	船坂分団長	坂	口	文	孝	24
19	大震災の体験					
	生瀬分団長	浦	入		稔	26
20	震災体験記					
	名塩分団長	家	門	一	男	27
21	人力と機械					
	越木岩副分団長	増	澤	勇	夫	29
22	1月17日その日その時					
	甲子園口副分団長	難	波	洋	三	29
23	大震災を思う					
	小松分団部長	樋	口	貞	雄	31
24	阪神大震災について					
	今津分団班長	上	嶋	隆	男	31
25	あれからの私は					
	鳴尾東分団班長	岡	田	和	泰	32
26	震災体験記					
	名塩分団班長	大	前	有	三	34
27	阪神大震災					
	建石分団団員	林		靖	博	35
28	私の1月17日					
	津門分団団員	平	井	得	晴	36
29	阪神大震災を振り返って					
	門戸分団団員	下	村	治	久	36
30	1995年1月17日(火)午前5時46分阪神大震災起こる					
	上ヶ原分団団員	奥	井	正	信	37
31	救助にあたって					
	下大市分団団員	岡	島		豊	38
32	震災体験記					
	高木分団団員	古	塚	雅	章	40
33	震災体験記					
	高木分団団員	古	塚	正	治	41
34	阪神大震災に思う					
	小曽根分団団員	宮	田	良	浩	41
35	震災体験記					
	名塩分団団員	谷	野	義	昭	43
36	悲しみを乗り越えて 我が町を守った消防団員					
	市民局消防団担当係長	藤	本		渉	44

は　じ　め　に

平成7年1月17日午前5時46分平穏な眠りから覚めやらぬ中、一瞬にして多くの尊い生命・財産を奪った「阪神・淡路大震災」により、我が西宮市は壊滅的な被害を受けました。

ここに、改めまして震災で亡くなられました方々のご冥福をお祈りいたします。

この度の災害に際しまして、消防団員の皆さんは、自宅あるいはご家族の方が被災されているにもかかわらず、消防団の地域配置性を生かして我が町を守るため、率先して出動していただき、火災の鎮圧、被災者の救出、その後1ヶ月にわたる給水活動に早朝から夜遅くまで従事していただきました。

震災時には、41件の火災が発生しましたが、皆さんの懸命な消火活動により、市内の火災は大火に至らず、救助活動につきましても、地震発生から3日間で家屋の下敷きになっている人の殆どを救出することができました。また、その後の給水活動では、家の近くまで水を運んでもらえるため、ご老人やご婦人の方に非常に喜んでいただけたと伺いました。

このように、被害の拡大を最小限に止めることができましたのも、皆さんの果敢にして冷静沈着な行動によるものであると心から感謝申し上げます。

この活動記録集は、震災後に財団法人日本消防協会から機関誌「日本消防」へ投稿依頼があり、会議等を通じて各分団へお願いいたしましたところ、数多く寄せられ、昨年9月に投稿したものを、西宮市消防団でも未永く記録保存し、この度の震災と消防団の活動を後世に伝え、将来起こりうる大災害による被害を最小限にとどめる参考になればと作成いたしました。

消防団の皆さんにおかれましては、震災当時の活動を思い起こしながらお読みいただき、今後の参考にしていただければ幸いです。

終わりに、この記録集作成にあたり、ご協力を得ました消防局の皆様に深く感謝申し上げます。



西 宮 市 消 防 団

大震災に直面して

団長 木嶋 巖

1月17日5時46分、初めて経験する大地震の瞬間は言葉で言い表せない。地面から突き上げられるような激しい揺れ、異常なまでの音、音、音。直ぐ停電。懐中電灯をとり、丁度年末警戒時に着ていた作業衣が洗濯してそのまま居間に吊ってある。直ぐさまそれを着て家を飛び出す。「非常招集だ」、そばの生瀬分団車庫に行く。副分団長と部長が来るが警鐘台のサイレンは電動のため作動せず。消防自動車のサイレンにて団員を非常招集する。管内を巡視し臨機応変の処置をとる様、団員に指示する。6時10分、宝生ヶ丘にて土砂崩れにより家屋埋没生き埋めになっているとの報を受ける。北消防署と共に生瀬分団の1隊がその救出にあたる。程なくして生瀬東町にて家屋倒壊一家4名生き埋め、残りの1隊がこの救出にあたる。震源地は淡路島北東部とのニュースを聞く。西宮の中心部から14キロメートル程離れている、この北部での被害状況から見て中心部はどうだろうかと不安が頭をかすめる。宝生ヶ丘の現地へ。土砂崩落と共にブロック擁壁が崩れ家屋を直撃。声をかけるが応答なし、扉、柱、梁、壁等を除去して進んで行かなければならない、容易なことではない。余震による土砂崩落の危険性も未だあったが、4時間後に救出するが既に息絶えていた。宝塚市境に近い生瀬東町現場では両親と子供3人が倒壊家屋の下敷きになり、父親は自力で脱出通報。母親と子供1人は、早く救出出来、宝塚市内の病院に搬送、残りの子供2人はかすかな返答あるものの梁、柱、壁、本箱に遮られジャッキを有効に使って穴を掘って行くが容易ではない。団員の経営する建設会社の重機の応援を得て救出、病院に搬送するが子供2人は午前中に死亡との報を受ける。漸く北消防署の無線により消防局と交信が出来、全市の状況を聞く。午前7時現在、火災10数件家屋の倒壊物すごく、又鉄筋コンクリート造りのビルも被災それに伴い生き埋めも相当数でパ

ニック状態と聞く。北部の被害は比較的少ない。北部分団（7ヶ分団）に管内の対応措置が終了次第、直ちに消防局に集結し以後の活動の指示を受ける様連絡する。7時30分頃、市役所の対策本部に行こうとするが随所で家屋の倒壊、道路の損壊、電柱の倒れ等で車は大渋滞し全く動かない。丁度次男が家屋は倒壊したが全員無事、大社小学校に避難していると山越えて連絡に来る。その車でもって山道を越え僅か14キロの道を2時間もかかり市役所にたどりつく。山道も落石が多く随所で車が立往生している。市街地に入るとつれ家屋の倒壊、道路の損壊等その被害は想像に絶する様な姿である。甲東園では山陽新幹線の高架橋が落下してレールが宙吊り、国道171号線も阪急今津線上に高架橋が崩落している。阪急神戸線の高架橋も倒壊し信じられない様な状態。市役所の対策本部にて岸本消防局長、川崎消防部長より、被害の概要と共に消防団の出動配備状況を聞く。消防団本部に行くが足の踏み場もない。書庫、ロッカーが倒れ一枚ガラスの大きな窓も割れ寒風が情け容赦なく吹き込んでいる。テレビも4メートル位飛んで床に落ちて背を向けている。鉄筋コンクリートの間仕切り壁は随所でヒビ割れ、すべて考えても見えないような状態で今回の地震の物凄さを物語っている。救助を求める通報がしきりに入る。「家族が埋まっているから」「うちの人を何とか助けて」と遂には罵声まで浴びる。全分団それぞれの地域で消火に救出にと活動している。差し向ける分団がない。「近所の人々でもって何とか救出して下さい」とお願いするより仕方がなかった。全分団（33ヶ分団）が地震発生と共に出動し夫々の地区で活動していたが、当日午後漸くにして殆どの分団が消防局の指揮下に入る事が出来、消防署員と一体化した活動が出来る状態になった。19日夕には救出活動も自衛隊と警察が行なっている甲子園口北町ホーキビルと仁川百合野町土砂崩れ現場を除けば終了する見通しとなり20日からは38台の消防自動車による給水活動に入る。2月20日ほぼ水道復旧の見通しがついたので打ち切る事に

なり、長かった1ヶ月余に渡る吾々消防団の活動も一応終了することになった。死者千人を超え全半壊6万戸。いろんな苦しい状況のもと文字通り不眠不休の態勢で活動したが余りにも想像出来ない未曾有の大災害であった。その対応は十分とは言えないけれども地域に密着している消防団として、その地区における火災また救助に最善の初動作業が行なえたものと自負しています。

市内殆どの区域に実施した給水活動も消防自動車の緊急性と地域の実情に明るい利点を有効に活用して偏地の人々や高齢者の方々に大変感謝されたとの報告を受け、ライフラインの復旧にいささかなりとも手助け出来たのではないかと考えています。

しかし私にとっては非常に辛い毎日でした。いくら任務とはいえ家族や親戚に犠牲者を出し、自らの家屋の全半壊等それぞれに相当な痛手を受けているにも係らず消火に救援救助活動に直ちに出勤し1ヶ月余の長きに渉る、懸命なる活躍をして下さった団員に対し満腔の敬意を表すると共に唯々感謝あるのみでした。また地域におきまして自主防災組織、婦人防火クラブ、消防団OB、まとい会の皆様のご活躍協力も忘れることは出来ません。一瞬の出来事、家屋倒壊の下敷きとなった高齢者は自力でもって這い出る力にも限度があり、どうしてもその行動が遅れがちである。倒壊した家屋も古い木造家屋が多く、その住人も高齢者が多かったという因果関係にあった。死者も全般的にその比率の高い事が救出の記録に如実に現れている。本団としましても火災時における高齢者の死亡率が非常に高い事実を鑑み、平成元年12月市の福祉事務所を通じ寝たきり老人、独り暮らし老人、老夫婦家庭等の災害弱者の名簿の提示を依頼する。紆余曲折漸く10ヶ月後認められたので有事における災害弱者に対する死傷等の防止について積極的な対応を実施するよう各分団長に対して次の様な指示を出した経緯があります。

平成2年10月17日

各分団長殿

消防団長

「老人の火災等による死傷の 防止対策について」

高齢化が進むとともに核家族化小家族化へと移りつつあります。地域住民と一番身近な関係にある消防団員が社会弱者の老人を対象に火災等災害時における安全確保に積極的に参加することは高齢化社会の役割の一つであると考えます。特に我々消防団は地域の実情に明るいというこの上ない利点を十分に生かし地域に密着したきめ細かい活躍が出来ると考えられます。今般各分団区域内の寝たきり老人、独り暮らし老人、老人世帯の名簿を福祉事務所の協力により配布することになりました。各分団長は老人の所在を充分把握し有事における適切な処置を実施していただく様お願いするものであります。申すまでもありませんが、この名簿につきましてはプライバシーの関係もあり他には絶対に利用しないよう分団長の責任において充分な管理をお願いします。

以上

しかし今度は、あっという間の出来事で災害弱者の人々に全くなす術もない状態でありました。又西宮市消防団は他市と異なり事務部局が消防局と分かれて市民局にあります。それ故により一層消防団と消防局とは常に車の両輪の如く日頃からのコミュニケーションが大切で充分な意思の疎通がなければなりません。火災や災害における相互の連携と一体感こそ重要な事でこれでなければスムーズな活動は期待出来ません。平成2年活性化の一環として消防局が4署3分署に分かれていますので団も消防局とのより一層強い連繫を考え分団を7地区に分け副団長も1地区に1名と7名に増員。火災や防災訓練はもとよりポンプ操法訓練、基本訓練その他全ての訓練を更に積極的に消防局の指導を仰ぐ様にしました。署員と団員が顔見知りの仲となり益々交流し、がっちりとしたネットワークを組むことが出来た。今度の大震災に対して臨機応変に対応、消防局がその指揮系統を躊躇することなく示された事により猶一層積極的に地域密

着の活躍が出来たのではないかと考えられます。体制が整っていてもいざという時、機能しなければ何もならない。昨夏、北部地域の水源丸山ダムが底をつく程の水不足に悩まされ、火災の場合消火栓の使用不可能を想定した異常渇水に伴う特別消防体制を基に作成した消火マニュアルによる訓練の繰返しが今度の大地震火災にどれだけ役に立ったかは計りしれないものがありその成果で明らかであります。それと共に西宮市当局や市議会の皆様の吾々消防団に対しその施設装備の拡充強化に常々深い御理解をいただいていた事について感謝致します。消防自動車については完全なまでに充実した配備であり、それが為今度の震災における最も重要な初期消火に支障なく行動出来たものと考えます。又各市町とりわけ近隣の消防団関係より早速心暖まるお見舞並びに応援隊の派遣等ご懇切なる御厚意に対しまして深く敬意を表しますと共に唯々感謝感激の他ございません。有難うございました。

消防団員732名の被災状況は、死亡2名、家族死亡16名、全壊199名、半壊123名、重傷2名、軽傷8名。これからの消防団の再編が大変です。

この度の震災で色々なことを体験しましたし、与えられた教訓は確かに多くあります。今後は消防団が地域に密着した防災機関として郷土愛の精神に基づいて地域防災のリーダーとして消防局、消防団、自主防災組織が3位一体となって災害から自分達の地域を守り、そして今迄の防災計画を見直して実践的な地域の防災計画のもと、実戦的又現実的な訓練に取り組んで少しでも被害を少なくする様心掛けねばならないと痛感しました。

最後に今度の大地震で亡くなられた方々の御冥福をお祈りすると共に被災されました皆様に心からお見舞申し上げます。

3月の初め一女子高校生から寄せられた感謝の手紙を披露します。

はじめまして私は16才の西宮で被災した高校生です。今大阪に引越して学校も転校しました。こ

の前朝日新聞を見ていて、すごいびっくりしました。西宮で長田の2倍も火事が発生していたなんて。私を含めて大半の西宮市民の人が「西宮では火事ってほとんどなかったんなあ」と思っていたと思いますよ。でも消防団員の人が非常時の為の事を予め考えてくれたお陰で長田の60分の1に火の手をくい止める事が出来たそうで本当に西宮市民として感謝感激です。もう本当にすごいです尊敬します。西宮市民の誇りです。寝てる時に突然ドーン、グラグラとものすごーいのがきたので核戦争が始まったのかと思いきやガシャーン、バリバリ、ベキベキと音とは思えない音がして真っ暗で何も見えなくてすごい怖くなってきて恐怖におののいて体の震えがとまらない。両親にやっと助け出されたのです。私が今運よく生きていられるのは細長いタンスの一番上の戸が開いて顔の横に突きささって他の倒れてくるものの支えになっていたからです。奇跡的です。5千5百人近い人が亡くなった。その一人一人の存在は計りしれない程大きい。大切な一番大切な命がこんなにも亡くなってしまった。信じたくない悪夢であってほしい。消防団員の人のもものすごい辛い思いでもって活躍されたでしょう。最後に本当に一生懸命にしてくれて心からありがとう。これからも西宮市民の誇りであって下さい。本当に本当にありがとうございました。

1月17日の1日

副団長 吉 井 潔

1月17日、今日は年1回の楽しみにしている店主従業員の慰安旅行で朝8時半に中型観光バスが迎えに来ることになっている。近くに住む従業員2人には、缶ビールと酒つまみを頼み船坂で一人、残りを神戸市北区長尾町から乗り合わせて北陸山代温泉へ行く予定だった。そろそろ5時半になるので早めの散歩に行こうかと思っていた。突然、突き上げる様な揺れと大きな横揺れが続いた。お

もわず蒲団をかぶる。土壁の落ちる音がした。

「地震が起きても絶対に外に出ては危ない。この家が壊れたら全ての家は倒壊してしまう。」と亡くなった親父の口癖を思い出した。妻は青色申告の決算書類作成のため徹夜で居間におり心配だったが、幸い無事でした。停電で真っ暗な廊下を手さぐりで居間の方に行くと壁が落ちたのか足元はザラザラ。台所の大きな食器入れは全部倒れて、妻が好きで集めていたコーヒークップ、ガラスの器等が散乱している。一番心配だったのは火事が起こっていないかという事でした。早速、本家の姉が尋ねてくれ、自分の家も家の中で20糎程の段差が出来てしまったという。冠木門と塀も倒壊してしまった。又、北隣の加代子さん宅も家が倒壊しておばあさんが生き埋めになっているとのこと。これは大きな被害がでたなと思い消防の作業服に着替えて越木岩分団の屯所へ行くべく家をでる。道路は大きく地割れし歩道の縁石は横倒しになり電柱が斜めになっている。途中で古田副分団長に会い

「播間分団長が家の下敷きになっている。今から救出に行く。」

と聞き私も同行する。入母屋造りの大屋根が西側に大きく倒壊している。団員も大勢集まり地元の人々と瓦を手送りで取り除ける人海作戦が仲々はかどらない。分団の部長が、

「時さん、山からユンボを持ってきてくれへんか。」

「よっしゃ！」

「三次郎、（後に4月1日付けで新規入団した狭間三次郎君）お前のダンプ出してくれ。」と次々と救出に向けての手筈が整った。時さんのユンボのお陰で作業が大変はかどった。私は北夙川分署へ情報の収集にでかけた。分署では救出の要請でてんでこまいの有様で、分団長宅が心配になり戻った。作業は大分進んでいて、

「出たぞ、毛布を頼むぞ」

との声に一瞬良かったと思ったが残念な事になってしまった。又、豊楽町の団員の兄宅で4人下敷

きになっているとの連絡で救出に向かう。この現場でもユンボが大活躍したが、救出した時は既に息絶えていた。この辺りは田舎造りの古い家が全て倒壊し多くの犠牲者が出た。本部との連絡も取れず困り果てており、夙川分団、大社分団の情報も電話が不通で全くわからない状況の中、本部からの電話待ちのために団員1名を残し午後の救出に出る。石剱町の文化住宅で2人、農協横で一人の犠牲者が出る。夕方近くになって漸く本部と連絡がとれ、

「明日早朝、消防局に集合して欲しい。」

との指示を聞く。夙川分団、大社分団はどうだろうかと益々心配になり部長が運転する消防自動車夙川へと走る途中、鉄筋コンクリート造りの3階建ての家屋が大きく道路にかぶさるような形で倒壊している、改めてこの地震の大きさを知る。夙川分団は仲村分団長以下全員無事で救助作業を行なっているとの事で安堵したが、分団長始め団員の半数の家が倒壊したと聞く。大社分団は国道171号沿いの広田町の火災に出動中。寿町、分銅町と倒壊家屋が道路をふさぎ難行した。やっとの思いで171号線に出たが、交通量が全くなく無気味であった。今から思うと171号線も門戸陸橋が阪急今津線上に落下して通行不能になっていたからだ。大社分団が水源を御手洗川に求めて放水しており、

「分団長、よく水利に川をおもいつかれましたな。」

「ここで、くい止めねば広田の町が全滅してしまいます。」

「途中の道路が壊れているのに、よく消防車をこんなに早くもってこられましたな。」

「団員が、ようやってくれましたわ。幸い土のうを積んでいたし数メートルもある石垣を飛び降りて堰止めてくれました。副団長さん、私の家も倒壊、又、親戚に犠牲者が出ていますけれども考えてもみない大災害、自分の事など言っておれません。ポンプ操法や基本訓練を平生やっというてよろしましたわ。朝からの放水で燃

料も切れ灯油を入れて補充もし付近の橋梁工事をしている業者からも譲り受けました。」

と申され、真に住田分団長の崇高な消防魂を見たような気がして改めて敬意を表した次第です。1月17日は、長い長い悪夢のような1日でした。慰安旅行のバスを待つ5人の従業員は10時を過ぎても連絡がとれず昼まで待っていたそうです。一山超えればこうも違うものかと思った。

阪神大震災の体験

副団長 松本 光央

平成7年1月17日午前5時46分、観測史上初の震度7の激震が文教都市西宮を巨大な力で襲った。自然の恐ろしさグラグラと横揺れドカンと一発、一瞬の衝撃を受けた。瞬間、体は家具、テレビ等の下敷きになっていた。幸いにも頭から蒲団をかぶったので命は助かった。重くて蒲団から体が出ない。いつも置いている枕元の懐中電灯も飛んだのか物の下敷きになってしまったのか判らない。やっと力をふりしぼり這い出して事務所の懐中電灯を見つける。家の中の有様に蒼白となる。ここが今、自分が生活していた家かと目を疑う。足の踏み場もないガラスの破片で一杯の中を土足で歩く。頭が痛い、家具の下敷きになった時頭を打ったらしく、瘤が2つ3つ出来ているが、すぐ外にでて近所の見回りに行く。倒壊家屋を見て啞然とする。町内が一変している。一軒、一軒声を掛けて安否を確認する中で、怪我人を見つける。一人住まいの中年女性が骨折して動けない、すぐ息子と車に乗せて松本整形外科に運ぶ。医者は来っていないが、病院の事務局に頼んですぐ引き返す。次は、倒壊家屋の階下で老人が生き埋めになっている。助けを求める声が聞こえる。近所の人と力を合わせて救出にかかるが工具がなく、各自ノコギリやバールを探し出してくる。今津分団も現場にかけつけて救助にかかってくれる。ノコギリ、バールでは仲々進まない。イライラしてくる。生

き埋めになっている老人に「頑張れ、頑張れ」と声をかけて励ます。約3時間が過ぎ、やっと救出すぐ畳の上に乗せ消防車で協立病院に運ぶ事が出来た。病院の中は頭、手足から血を流して苦しんでいる人、骨折で動けない人で一杯だ。怪我人を病院に頼み、すぐ引返し再び倒壊現場へと向かう。津門で生き埋めの人の救助を求められる。倒壊現場に行き、いくら大声を掛けても中からは何の返答もない。救出する道具がなく、どうする事も出来ず消防局に連絡を取り救助を頼み今津分団に引き返す。分団員は3班に分かれ、地区の倒壊現場の救助に出動している。17日、今津地区で生き埋めになった被害者9名を救出したが、重傷のため2名の方は死亡された。火災は上甲子園地区、高木地区で発生したが、各分団長の素早い活躍で大きな火災にならず最小限度でくい止め鎮火出来たのはすばらしい事です。各分団員の皆様には自宅の倒壊、親族に死傷者があるにも関わらず住民の救助活動火災消火活動、又、1月20日から1ヶ月間の給水活動には各分団員交替で朝9時より夜8時過ぎまで、各地区に給水して回り市民の方々に喜んでいただいた。17、18、19日は食料も少なく飲まず食わずで活動してくれた各団員の方々には頭が下がる思いです。この大震災の救助活動に当り今さらながら救出器具の整備の不足、緊急時の通信器具不備等を強く感じさせられた。被災者の人々も何をどうしていいのかわからず、電話は不通、公的な情報も何もない不安の中で近所の人達との励まし助け合いで、どれだけ救われ人の心の優しさを改めて発見する事が出来たと思う。この震災災害に北部の生瀬、名塩、山口地区の各分団員の方々には道路状況の悪い中救助活動に馳せ参じていただき、又給水活動には1月20日から1ヶ月間、早朝より夜遅くまでご活躍いただき深く感謝いたします。今度の災害に直面して我々消防団員が一致団結してこの震災を乗り切ったことを誇りに思っています。

「私の長い一日」

副団長 八車 典雄

突然地鳴りとも何ともいえない音がして、身体がもの凄い力で上下に揺れた。これが最初に身体に感じた印象でした。隣に寝ていた妻が、

「地震や！」

と叫んで起きかけたので、

「起きたら危ない。布団を被れ。」

と声をかけ、頭から布団を被って揺れの治まるのを待った。この間、物が落ちてきてもの凄い音がして、この世の終わりのような気がした。少し治まったので、今の内と思って服を着て時計を見ると6時であった。懐中電気をつけると、足の踏み場もないほど、めちゃめちゃに物がひっくり返っている。揺れ戻しが来ると危ないので、外に出ようと思い玄関の方へ行くと、店の品物がひっくり返り足の踏み場もない有様だった。スクーターも倒れていたが、表の戸がすぐ開いたので、外へ出ると隣の主人も出てきたので、お互いの無事を確かめあいました。しかし、裏の家が倒壊して、人が中で逃げ遅れているとのことで、すぐに行ってみると中から出てこられたところで安心していたのもつかの間、少し南の方の家が倒壊して娘さんが中にいるとのことで、救助に行き瓦や柱などを取り除き救助して家に帰ってみると、また1軒の家が倒れて隣の家へ寄り掛かり、戸が開かなくなっていた。中に人が居るとの事ですぐに行くと、無事だったので皆んなでよかったと胸をなでおろした。又、鳴尾市場の南の家が4～5軒崩壊して人が生き埋めになっているとの事。消防団の作業服に着替え、すぐに現場を見に行き、その足で鳴尾中分団の分団長の家へ行き、現場の話をし出勤を命じた。現場に引き返すと、鳴尾消防署長から、消防署だけではどうにもならないので、消防団の出動を要請され、電話が通じないためスクーターで、鳴尾地区の全分団に出動の連絡に走る。田中理事の家へ行くと、様子を見に行き不在だったので奥さんをお願いして、鳴尾東分団の分団長宅へ

走る。鳴尾東地区は、もの凄い液状化現象で、スクーターがうまく走らない。気が焦るが何ともならない。やっとの思いで辿り着き出勤をお願いして、今度は鳴尾西分団へ走った。臨港線は車で一杯のため悪いと思ったが、歩道の上を走って分団長の家へ着くと、鳴尾西地区は比較的被害が少なく、鳴尾地区へ様子を見に行くと行って出たとの事。とりあえずすぐ現場へ出勤するよう奥さんに頼んで現場へ帰ると、4名救出したとの事。まだ中に人が居るといので、消防署員、消防団員、地元の人達と協力して掘り出したが死亡していた。(死亡者夫婦は私の知人でした。)又、鳴尾町5丁目の国道43号線沿いの家が崩壊して女の人が生き埋めになっているとの事で、現場へ急行したところ、中国の女の人が生き埋めとなっていた。ベッドの上に家の梁が落ちてきて、その下敷きになっていた。この人を引き出すのに時間がかかった。梁をチェーンソーで切りやっとな引き出したのが午後2時半頃でした。又、鳴尾北分団、小松分団、小曾根分団は火災現場で活躍してもらいました。団本部に連絡に行こうとスクーターで出掛けようとした時、団長が見えられ、本庁南・北、瓦木、甲東地区がひどいので、鳴尾の方が落ち着いたなら、西宮消防局の方へ来るように言われたので、そのことを各分団に連絡し、私は、鳴尾中分団の車で消防局へ行き、消防局の指示で救出作業に参加しました。私の見た中では、夙川方面の芦屋よりの所がひどいように思われました。夜11時頃に各分団詰所で待機するよう指示があったので、鳴尾中分団の詰所に帰り休憩を取り、皆んなで地震の恐ろしさを話し合いました。午前2時頃、団本部より明朝消防局に集合するようとの連絡があり、明日の出動をお願いして解散しました。家は朝出たままです。帰ってみると、妻が少し片づけていましたが、重いものは動かないのでそのままでした。片づけは明日と言って、床につきました。

娘も心配して、豊中から来るまで来てくれたそうです。武庫川の堤防がひどく傷んで走りにくかったようです。4時間かかって孫と一緒に食料

や水を持ってきてくれたそうです。私の帰りを待っていると遅くなるので、帰ったとのことでした。

夕方、西宮消防局の前の国道2号線に立っていると、どここの国の外人か知らないが、20歳位の男の人が何か手助けすることはありませんかと言ってくれました。又、私の家の裏の中学3年生の男の子も何か役に立ちたいので、

「する事があれば言って下さい。」
と言ってくれたのも心に残る嬉しい出来事でした。
私の長い1月17日でした。

1月17日の行動

副団長 吉田 昭光

1月17日の早朝、突然体が上下にゆすられ叩き起こされた。何が何だかわからず立つに立てず4つんばいでも前に一步も進めない。家具は倒れガラスは割れる壁土は落ちて土煙が家中舞い上がり口の中は土埃でからからになり電気は消えて真っ暗闇。その内に揺れるのが止まったので慌てて懐中電灯を探し作業衣を着て外に出た。娘もタンスの下敷きになっていたが、

「何とか這いでた。」
と言って2階から降りてきた。長男夫婦も子供を抱いて横の家から、

「すごかったなぁー。大丈夫か。」
と出てきた。家族全員怪我もなく無事でよかった。そうこうしている間に次第に辺りが明るくなってきた。石で積んだ門がバラバラに落ち門扉は外れ倒れている。裏に回れば石灯籠も倒れ家の雨戸ガラス戸は外れ、中を見れば居間のボードの壁がはずれ落ちサイドボードは倒れテレビは転がり落ち無惨な姿でした。駐車場のアスファルトが5センチ位の幅であちこちでひび割れしている。近所の人々が皆外に出て、

「すごかったですね。大丈夫ですか。」
と声をかけ合っていた。隣近所の家は屋根瓦が落ちモルタルの壁はひび割れて落ち殆どの家は傾い

ている。電柱という電柱も傾き、道路は割れて20センチ程下がり段差がついている。幸い倒壊家屋は少なく家の下敷きになった人はなかったようである。長男が事務所に行くと言うので、

「神明町の家も見えてくるように。」
と言う。暫くして家は北側の道路上にペッシャコに倒れているとの連絡があり当時、誰も住んでいなかったのが幸いした。近所の人が、

「倒壊したアパートに一人暮らしのおばあさんが閉じ込められている。」

と言うので救助に出むく。又、ガス洩れがあるとのことで大阪ガスに電話するが通じない。仕方なく車で連絡に行くも道路があちこちで損壊や倒壊家屋でふさがり相当な時間を要した。まもなくガス会社から見え、本管の栓は締まっているが溜っているガスがなくなるまで時間がかかるから火を使わないよう注意をしてほしいと帰っていった。その後、消防団本部へ連絡に行く。団長さんより芦原地区に行くようにとの指示を受け、先、芦原分団車庫へ行く団員の方達は既に出動して車庫近くの木下君の父と祖父母が倒壊家屋の下敷きになっているので救助活動中、父は何とか救出し病院へ搬送するが祖父母は残念ながら生きて救出することが出来なかった。西福寺では院住と長男の嫁と娘さんが亡くなられた。芦原地区では木造家屋の殆どが倒壊、神明町の文化住宅の火災では2人の焼死者を出したが青木町の火災は焼死者もなく初期消火に成功した。若竹文化会館に行くと1階から3階まで避難民で一杯、近くの教育センターの体育館は死亡者と避難民で足の踏み場もない程の混雑だった。深夜納庫に帰って待機していると団本部より連絡があり、明日自衛隊が重機をもって高木地区に救援に入るので阪急北口駅東側の高架下が満水で車輛の通行が不能なため高木分団と芦原分団は直ちに出勤して水を処理して通行可能にするよう指示を受け出勤す。今津分団、津門分団も応援夜半近く通行できる状態になった。今日一日の団員の労をねぎらい明日の本部よりの指示を伝え解散する。

阪神大震災について

理 事 田中 一郎

朝、ドーンという音と共に目が覚めた。いったい何が起こったのか。パリーンとガラスの割れる音が、動こうにも動けない。地震だと気が付いたのは暫く経ってからのことでした。慌てて外に出て、車のラジオをつけてみた。震源地淡路島、阪神高速橋桁落下。余り詳しい情報は入ってこない。辺りはまだ暗く、いつもよりシーンとした感じだった。

空も明るくなってきた頃、消防の出動命令が入った。慌てて消防署へ急行。途中見た光景で、被害の大きさを痛感しました。消防署からの指令により現場へと急ぐ。倒壊している家屋があちらこちらで目に付く。倒壊している現場は、我々の力では手の付けられない状況だ。バールやジャッキを使用してもびくともしない。消防署の応援を待って、次の現場へと向かう。次の現場へ向かうにも、道路は麻痺状態でなかなか進まない。焦りと苛立ちの中、自然と涙が溢れてくる。

「今、いったい何ができるのか。精一杯やるしかない。」

とそう自分に言い聞かせた。

こういった状況の中であわただしく3日間が過ぎ去った。もう分団の手に負えない場所ばかりである。分団では、給水活動を行うことになった。

この震災で特に感じたことは、緊急車の道路確保の不備である。現場へ向かうにも道路は、麻痺状態でなかなか着かない。幹線道路が緊急車両以外通行禁止になっていれば、被害が軽減されたのではないのでしょうか？それと連絡手段の不備である。無線は、消防署からの一方通行で、こちらからは電話連絡しかない。その電話も不通状態で、連絡するすべがない。無線での連絡が充実していれば、もっと効率よく活動できたのではないのでしょうか？給水活動をしていて感じたことは、皆きちんと順番を待ち、残り少なくなってくると水を譲り合ったり、小さな子供までが列に入り水を

運んでいる。ロサンゼルス大地震では、暴動が起きたりしていましたが、日本では、こういった事態になっても秩序正しく皆で協力し合っている姿を見て、安堵感を覚えホッとしたような気分になりました。この震災で、失ったものはもの凄く大きいけれど、得たものも大きいように感じます。

今まで毎月各分団で訓練を行ってきましたが、今回の地震では、訓練になかったようなことを行い、非常に勉強になりました。今後、このような事態が起こらないことが一番望ましいことなのですが、万一起これば、今回の教訓を生かし、少しでも被害をくい止められるように日頃からの訓練に励みたいと思います。

西宮市消防団の1月17日

西宮市消防局消防課長 岸本 正

死者1,000余名、全半壊家屋約6万世帯の被害を生じた西宮市は、17日から19日の3日間で火災が41件発生し、うち、発災から約1時間以内に22件が発生した。

木嶋巖団長以下33分団の団員は、通信連絡が途絶され消火栓が破壊し、瓦礫と化した街で、迫り来る炎と助けを求める声の中、火災の鎮圧と人命救助を絶対使命とし、自ら被災しながらも死力を尽くして闘い、延焼を最小限に留め、倒壊家屋から多数の人命を救い出し、市民は勿論、全国の消防関係者から地域防災の手本として高い評価を得た。

過酷で長かった17日の震災直後に素早く行動を起こした各分団長の行動を紹介（3月30日開催の分団長会議での記録）する。

■浜協分団～鈴木治男分団長

阪神西宮駅周辺の倒壊家屋現場で救出活動を実施。救出用器材が不足し、消防局にジャッキを借りに行くが、全て使用されて無く、救出に困難を極めたが、11人を救出した。その後、8時半に発生した戸崎町の火災に出動。引き続き、上甲子園

の消火活動を実施した。

■用海分団～尾山一男分団長

すぐさま、与古道町の倒壊家屋現場に出動し、3人を救出。その後、消防局隊と合同で市庭町の救出業務に従事し、14時頃女性1人を救出。16時頃、戸田町の火災を覚知し出動。鎮圧後も合同で産所町の倒壊家屋現場で18時頃に男性1人を救出した。

■安井分団～萬國俊治分団長

直後に発生した神明町の火災現場に出動。消火作業とともに付近の倒壊家屋現場で15人を救出し、焼死体2体を収容した。鎮圧後、青木町の火災に出動。周辺で10人を救出し、消防局隊と現場交替し、当日は午前1時過ぎまで残火処理を実施した。

■建石分団～山田茂分団長

車庫前にガレキが散在し、車両を出動させるのに苦労した。弓場町と郷免町で火災が3件発生していた。弓場町6番の消火活動に当たると共に、周辺の倒壊家屋現場から18人を救出した。団員がほぼ集まったのは昼頃。弓場町の火災鎮圧後、郷免町の火災の残火処理を実施した。

■芦原分団～中田信一分団長

6時過ぎに分団車庫へ行くと、既に団員が3名ほど集まっていた。出動しようとしたがエンジンがかからず、近所の人のトラックで引っ張ってもらいエンジンをかけた。神明町の火災現場に向かうとしたが、倒壊家屋からの救出要請者が殺到し、各団員の手を引き哀願するため消防車をそのままにし、西福町他で10人を救出した。各現場には参集した団員も加わった。その後詰所に戻り、他の団員が出動していた青木町の火災現場に向かった。

■大社分団～住田茂一分団長

広田町の火煙発見。参集途上の消防局員と協力し、マンションの防火水槽から取水し放水。民家が密集し、火勢も強いとため、水槽水では不足すると思え、東川からも取水し、ある程度鎮圧してから現場西に移動し、積載していたPP土俵20袋で川の水を堰き止め放水した。途中、燃料がなく

なったため灯油40リットルで代用、ガソリンスタンドで軽油の購入を命じたが、開いておらず遠方まで捜すのに苦慮した。

■夙川分団～仲村勝次分団長

直ぐに詰所に行くと全員が集まっていた。車両は車庫から出し、火災に備えた。2班に分け、阪急の南北地区で救出活動を実施した。雲井町、殿山町他で13人を救出した。倒壊家屋からの救出は困難を極め、付近住民よりチェーンソーを借用し棟木を切り救出した。南越木岩町では消防局隊と合同で1人救出した。

■越木岩分団～古田公雄分団長

朝から区域内で救出活動に従事。樋ノ池、南越木岩、豊楽、菊谷、西平町他で付近住民の協力を得て、また民間のユンボを借用し13人を救出した。その後、消防局と合同で相生町で3人を救出した。

■段上分団～横井正義分団長

農家が密集した地域であり、団員20人中16人の家が全壊した。団員の隣近所の救出活動に忙殺されたため、消防車は出ていない。段上町1丁目から6丁目までの倒壊家屋からの救出は15人を数えた。道路損壊や通行障害が激しく、救出活動は全て徒歩で実施した。夜は報徳学園の消火活動に従事。段上小学校のプールを使用した。

■門戸分団～小西康廣分団長

7時過ぎに門戸岡田町で発生した火災に16人で出動。参集途上の消防局員と合流し、消火栓が断水のため、四十谷川を倒壊家屋の瓦礫で堰き止め、1戸のみで延焼を阻止した。消火活動中、丸橋町の救出要請が入り、半数をそちらに向かわせた。昼過ぎに下村副団長から上田市地区の被害が甚大で転戦するよう連絡が入り、現場へ出動し5人を救出した。

■上ヶ原分団～山田實分団長

団員が各地区に点在しているため、召集後に各地区の被害状況が即座に収集できた。付近住民の応援を求め救出活動を実施した。関西学院大学の下宿生が多い地域であり、上ヶ原三～十番町一帯で、学生15人、住民6人を救出した。

■下大市分団～高木久之分団長

すぐさま団員を召集し、担当区域内の下大市東、西町、甲武台住宅、門前町一帯で救出活動を実施した。2階建文化住宅の1階部分が軒並み潰れていたり、「く」の字に折れており、救出活動は困難を極めたが15人を救出した。

■神呪分団～中務直一分団長

分団車庫のシャッターが壊れていた。区域内の生き埋め現場は数多く、倒壊家屋の下から助けを求める声があるところから救出活動を実施し、神呪、上甲東園、松籟荘1番で6人を救出し、5人の生存救出に成功したが、1遺体は家族に確認してもらった。

■上大市分団～松本俊治分団長

新幹線の架橋が落下し、全壊家屋が多く生き埋めは40人程発生した。1分団のみで地区内の救出を対応したため、活動は困難を極めたが、上大市2丁目を中心に10人を救出した。救出道具がなく、金テコ、ロープで行った。消防局や団本部に連絡し、応援を求めたかったが、連絡手段がなかった。

■今津分団～江川駿分団長

6時過ぎには全員が集合していた。周辺現場の救出活動に団員5人が出動し、他は詰所で火災に備えた。今津水波、久寿川、二葉町の4箇所生き埋め情報があり出動し、8人の救出に成功した。その後、上甲子園の火災現場に出動した。

■津門分団～浅井克己分団長

団員に連絡し、6時30分頃集合した。浜田町の生き埋め現場に出動し、曙町の2ヶ所で6人救出した。残りの団員は津門周辺のパトロールを実施。その後、津門仁辺町の消火活動に出動。引き続き消防局より上ヶ原方面の救出要請があったので出動した。救出後、再び津門仁辺町の再燃火災に出動した。

■高木分団～古塚貞雄分団長

分団長自身が生き埋めとなった。すぐに召集のサイレンは鳴っていた。1時間後に救出され詰所に赴いたところ、団員は全員救出活動のため出動していた。農家の梁は大きいため、救出は困難で

詰所に置いていたジャッキを活用した。高木東、西町で14人救出した。7時頃に詰所西側で火災が発生したが、事前にポンプ車は農業用水に部署していた為慌てなかったが、約4百メートルのホース延長に苦勞した。

■瓦木分団～岡本久一分団長

6時頃、倒壊家屋の下敷きとなった重傷の女兒を消防車で病院搬送。その後、大屋町、瓦林、中島町の倒壊家屋から救出活動を実施。困難を極めたが8人を救出した。救出後、甲子園北町の火災に出動し鎮圧後、無線傍受機で高木西町の火災を覚知し、再び出動した。

■甲子園口～浅井正信分団長

JR駅前のホーキビルが倒壊。6時頃ホーキビルに向かったが途中で救助要請があり、なかなかホーキビルに到着できなかった。ビルの北側から出火したため、救出にかかっているものはその場に残し、団員5人で消火に向かった。駅前の防火水槽を使用。応援部隊要請のため、団員一人を消防署に向かわせたが、応援部隊はすぐには来なかった。その後消防局より可搬ポンプを積載した軽四輪車が到着し、新堀川に部署したが液状化のため、途中焼き付き自隊が新堀川に変更し放水を続け、夜中の3時過ぎに鎮火した。救出は、甲子園口、二見町一帯で12人救出した。

■上甲子園分団～茂木清分団長

近くの文化住宅が倒壊し3人ほどで救出活動を実施。近隣の文化住宅でも要請があり7人を救出した。また倒壊した文化住宅より出火し22時まで消火活動に従事。断水の為上甲子園中学校横の川に水利部署したが、水が少ないため車載のブルーシートで水を堰き止めて放水した。夜中に再燃したため再出動した。

■鳴尾中分団～喜田利竹分団長

鳴尾市場南の民家が3軒倒壊したため、半数の団員で救出に当たった。2人は生存救出したが3人は死亡していた。その後、鳴尾町5丁目の文化住宅等で救出活動を実施した。これらの救出には、東、西、小曾根分団から応援してもらい合計7人

を救出した。救出後、消防局の指示により市民グラウンドにヘリ輸送された血清を取りに出動した。

■鳴尾西分団～石野吉英分団長

すぐに八車副団長の自宅に行き、鳴尾市場南の救出現場に応援出動。その後国道43号線南の倒壊現場に出動し、消防局隊等と合同で救出活動を実施し3人を救出した。その後消防局に行くよう指示を受け赴き、午後からは広田町他2件の救出現場に出動し2班に分かれ活動し男性と老人夫婦を救出した。ここでも消防局隊と行動を共にし、死亡収容者は病院に搬送し検死を受け、中央体育館の遺体安置所まで搬送した。

■鳴尾北分団～井上義夫分団長

甲子園五番町で火災が発生したため、詰所に行き召集をかけた。車庫のシャッターがなかなか開かなかったため、シャッターを壊して車を出した。現場では消火栓が使えないため、防火水槽に部署し放水した。火勢は屋根を突き抜け最盛期であった。2線放水で防御したが鎮圧まで時間がかかった。その後花園町の救出現場で消防局隊と共に活動していたが五番町の火災が再燃したため反転した。

■小松分団～永田文政分団長

鳴尾北の応援要請があり、五番町の火災に出動した。消火活動中に上甲子園3丁目の火災が発生し、消防局隊の指示で転戦した。火災鎮圧後、鳴尾消防署長の指示で花園町の救出現場に出動し消防局隊と共に活動した。

■小曾根分団～岸秋廣分団長

6時50分に鳴尾市場南の救出現場に出動し1人救助。その後国道43号線南の倒壊現場に出動し救助活動。その後、上甲子園3丁目の火災現場に出動し、次に甲子園口北町のホーキビル現場へ、その後甲子園口3丁目の救出現場に出動し1人救出した。救出後、清水町、二見町の倒壊家屋現場に出動した。

■鳴尾東分団～大石恒夫分団長

区域内は液状化が激しいため、道路の損壊状況調査を実施。終了時に鳴尾市場南の救出要請が入

り出動。当現場での救出者を車両で兵庫医大病院まで搬送し、引き続き国道43号線南の倒壊現場の救出活動の応援。その後の指示を団長に仰いだところ、消防局に集結するよう指示があったため局に到着。そこで甲子園口3丁目へ出動指示を受け出動し、小曾根分団と合同で作業実施。ここでも、当現場の救出者を兵庫医大病院まで搬送した。

■名来分団～前田勝年分団長

区域内を巡回し被害状況調査実施。塀の倒壊や屋根瓦の落下があった。負傷者はいなかったため団員の召集はしなかったが、昼頃に団長から消防局に集結するよう指示があり出動した。局の指示により浜脇方面に出動。消防局隊と行動を共にし2人生存救出。3人死亡救出。その後苦楽園方面の倒壊現場に出動した。

■下山口分団～仲正和分団長

区域内を巡回し被害状況調査を実施。塀の倒壊や灯籠の倒壊があった。団員の召集はかけなかったが、昼頃に指示があり消防局に出動した。指示により安井町の倒壊家屋現場に出動し、現場付近にいた自衛隊と合同で作業を実施。梁の下敷きとなり困難を極めたが1人生存救出した。その後自衛隊と共に投光器を使用し付近の搜索活動を実施した。

■上山口分団～上谷良一分団長

すぐさま、三役に連絡し6時30分に27人の団員召集を完了した。車両で区域内を巡回し、狭い道は3～4人が組となり調査を実施した。通行障害物件を除去し8時に一旦召集を解き幹部9人が詰所に残り、山口分署と連絡を取り合い他団員は自宅待機とした。地域内の民生委員と連絡を取り独り暮らしの老人宅を訪問し無事を確認した。指示により消防局に集結し救出現場への出動要請を受けたが地理不案内のため消防局員1人が同乗し弓場町、郷免町で2人、安井町で2人それぞれ救出した。

■中野分団～北浦治分団長

6時10分に詰所に出動した。団員は自主的に16人が参集した。午後に消防局に出動し指示により

江上町、青木町の倒壊家屋現場に出動した。地理不案内のため消防局員1人が同乗し江上町で老女を生存救出。青木町で2人死亡救出した。

■船坂分団～坂口文孝分団長

6時過ぎに団員2人と共に区域内を巡回し救出要請があり消防局隊と合同で活動したが救出済みを確認した。とりあえず給水作業準備にかかり、婦人会に炊き出しを指示した。本部の指示により消防局に行く途上、安井町Nマンションで住民から救出要請を受け上山口分団金仙寺班と共に活動実施。建設協会2社の協力を受け2人を生存救出した。後1人残っているとの情報を得るも重機でないと無理であり、要請すると共に救出活動を継続したが重機が調達できず、0時30分関係者と調整の上、到着した消防局隊と交代した。

■生瀬分団～浦入稔分団長

詰所備え付けのサイレンが使用できないため車両のサイレンで召集した。ガス漏れが発生していたため火気使用についての広報をしながら区域内を巡回した。生瀬東町で生き埋め発生との報があり出動し、9時過ぎに4人を救出した。その作業中、宝生ヶ丘でも生き埋めがあるとの情報を得たので、団員の半分を回して1人を救出した。その後、消防局に向かい千歳町の倒壊家屋現場に出動し6箇所の現場で6人を救出した。

■名塩分団～中条寛爾分団長

神社の灯籠が倒れ下敷きになった人がいるとの情報があり救出のため出動した。既に死亡していたが収容後地域内の巡回を実施。午後から本部の要請により消防局に参集し局員1人が同乗し夙川方面で救出活動を実施。救出した女性をポンプ車で病院搬送した。

以上、各分団長の行動から分かるように指揮統制が困難な状況下、木嶋団長以下、古藪、下村、吉井、松本、八車、中山、吉田各副団長及び田中理事の本部員が迅速的確な指令を出し、各分団はそれに応え相互に連携し、消防局隊と一致団結し未曾有の災害に対し使命感に燃え敢然と立ち向かった。救出活動の終了に伴い、20日からは団車

両に簡易タンクを積載し市内全域に給水活動を実施しここでも大きな感謝を受けている。

最後になりましたが、この震災により犠牲となった越木岩分団長播間重三郎氏、上大市分団班長中島健夫氏に衷心からご冥福をお祈りすると共に愛する家族を亡くされたり、自ら負傷したにも関わらず防災活動を続けた団員の皆様に最大級の敬意を表します。

私の1月17日

用海分団分団長 尾山 一男

私は毎日午前5時過ぎに西宮神社にお参りに行く。この日も5時半頃、先ず本殿の参拝をすませ何時ものように南宮神社のお参りをして狛犬の足を触りに行こうとすると神殿の方から何だか押されるような感じでどうしても狛犬のところへ行くことが出来ない。しかたなく階段を降りた瞬間に空が少し赤くなり、ものすごい地鳴りと揺れが起こり私の目の前にお社が倒れてきた。あの真っ暗な中に倒れる時の埃は、辺り一面白くなったような気がした。私もその場に倒れた。その時、初めて地震だと気がつく。私の周りは倒壊した玉垣の石や灯籠で一杯だった。背中から足の方へ丸い石らしいものが走った。その時に足の指が3本折れたらしい。(後刻、医者に行ったら気がつく)早く帰宅せねばと気は焦る。痛みも忘れて急いで家に帰ると入口がつぶれて入れない。横にあった棒で撲って中に入ると妻が冷蔵庫と水屋の間に挟まれて身動き出来ず苦しんでいた。早速、助け出す。夜が明けて7時頃、与古道町のアパートで生き埋めがあると連絡があり早速、分団員と共に救出に行く。まだ本部から連絡がない。私が神社参拝で留守にしていたからだろうか。与古道町の救出は丁度、大工さんや近所の人に来てくれ重い柱等の取り除きを共に行ない助け出す。若い男性の方で大変元気だった。又、同じ時本町の方にも生き埋めがありこの人は女性であったが、残念ながら救

出した時は既に死亡していた。気の毒である。成人式に帰って来てて運悪く震災に遭い非常に可哀想であった。漸く本部の方から指示があり他の団員は市庭町や産所町の救出に行く。私は染殿町のおばあさんの救出が仲々手間どっていたので、その方に行くが元気で救出する事が出来た。足の痛さも忘れて頑張る。午後から市庭町の倒壊アパートの救出に行くが夕方になってから足が非常に痛み歩行困難のため団員に付き添われて一応車庫に帰り連絡にあたる。分団員の帰りを待ったが足が益々痛むので治療に行く。夜半、分団員が本日の救出活動は終了したと車庫に引き揚げてきた。今日の一日は予期せぬ大惨事で大変だった。被災された方は非常に多く明日早朝よりの救出作業の場所の指示を受けている。頑張らなければならない。

その時私は

上ヶ原分団分団長 山田 實

午前5時30分頃、目覚めとともに朝刊を取り込み、寒かったのでそのまま再び寝床に横になり、ニュース等に目を通していたが、昨日の疲れからかまた深い眠りに陥り、まさに悪夢としか云いようがないドカンと云う轟音と共に、今までには体験したことのないガクガクとしつこい横揺れがあり、必死で両肘を突っ張り耐えていた。その間、隣にいた家内は、

「地震や！早く逃げよう。」

と言いつつ、押入の襖に手をかけたが、がんとし開かなかったらしい。

「馬鹿！今飛んで出たら大けがするぞ、一寸待て。」

と一喝した。今迄の地震ではこうした注意が普通だったのだが、大正4年築の丈夫そうな母屋も一瞬恐ろしいほどに静まり返った。

「それ今だ！」

と一緒に着の身着のままで出口に近いテレビの間へ一歩足を踏み出したが、『ガキッ、という凄ま

じい音がした。既に、ガラス張りの建具や水屋等が散乱しており、母屋を囲む長い納屋やブロック塀は、最初のドカンという直撃で、倒壊していたのである。朝の闇だったので、普段よりは明るく脱出に幸いしたが、気になるのは離れ座敷にいる年老いた両親の安否であった。急いで無事を確かめるために

「どお？」

と大声をかけた。声は低いが、

「あゝ」

と力強い返事が返ってきたので、ああ良かったなあと暗闇に浮かぶ母屋の棟を見上げた途端、

『バキバキバーン！』

と云うもの凄い大音響と共に、建物がススや土埃と共に朝闇の中に沈んでいった。この間、飛び出してから僅かに40秒足らずの出来事であった。長い間の思い出の多い住居が、一瞬にして消え失せたのである。何とも言えない想いが頭を掠め、無我夢中で全壊した屋根瓦の上へ駆け上がった。まるで戦時中の大砲を空に向けて据え付けたように、すすけて真っ黒な棟木が真っ二つに折り目も白く鮮やかに45度の角度で空に突き上げていた。崩れたとは云え、足下の位置は8米の高い所である。辺りは夜明けと共に視野も広がり、周りの異様な風景に愕然としたものである。慌てふためき、転がるように屋根から飛び降りた。想像を絶する惨状を目の当たりにして、これが真に一刻の有余もならぬ緊急事態であることは分かっていた。何しろその時は、緊急事態に不可欠の電話が不通となり、ガス、水道、一時的ではあるが電気まで断たれ、団員個々への緊急連絡も取れず、だからとて車は落下してきた屋根瓦が乗りかかり、運転できる状態ではなかった。お陰で家族全員無事助けられたのであった。再び部屋の内壁が落ちて、全壊寸前の両親の安否を見舞って後、後のことは家内に任せてと心に詫びながら、先刻よりまず一番気になるのは分団区域の被災状況と上ヶ原二番町から十番町に居住する20名の団員の家族と近隣の安否であった。

時が経つうちにつれて、こう云う事態にありがちな善意の野次馬的な伝言による犠牲者もかなり出た様にみえた。この度の災害では、過去の火災出動や防災出動のようにサイレンや警鐘を乱打し、緊急出動をかけるわけには行かなかった。なぜならば、何と云っても開村以来の大震災である。同時刻にしかも広範囲に被害を受けているであろう事を思うとき、一時パニック状態にならんとも限らず、正に危険を感じたので、一刻も早く自分の足で各々その地域の団員と連絡を取りながら、現場現場での先輩（元消防団員）や一般住民の協力を得ながら、被災者の救助に全力を傾け、随時現場を巡回して救助活動を続けたが、数々の現場の状況は言語に絶するものがあり、あまりにも無惨であった。昼前になって、一時消防自動車を出動させたが、やはり現場ではジャッキや金テコ又はノコギリ等の道具に頼るしかなかった。しかし、狭い場所での作業であるので、かえって功を奏したように思えた。通信網を断たれ、消防署への連絡もままならず、さりとて消防署の応援もなく、被災当日は、何となく町全体が重苦しく感じられた。このため、上ヶ原分団は単独行動となったが、沈黙のうちにも素晴らしい救助活動が進行し、全てがぶっつけ本番ではあるが、事故もなく初期の目的を果たし得たことは、木嶋団長の下に幹部はもとより、団員一人一人が崇高な消防精神により郷土の防人として厳しい訓練と努力を重ねてきた結果であると思う。この日の上ヶ原分団が関わった犠牲者は、団員2名の父母それぞれ一人と、活動を共にしてきた先輩達2人とその家族の2人で、地域としては学生の寮や下宿が多く、学生さん8人を合わせ実に14人の尊い命が瞬時にして失われたのであった。しかし、それらは今日始まったばかりである。今後も強烈な揺り戻しもあるだろう。予測しがたい事態があるかも知れない。明日への警戒と救助と活動に備え、19時頃団員と共に家路へと解散した。

1月18日（火）

出動人員 18名

出動場所 分団区域内

活動内容

- ①被災者の状況の確認（避難場所）
- ②危険場所の解体片付け（道路上）
- ③学生寮における搜索と避難の確認
- ④当地域は水路と溜池の多い地域のため二次災害を防ぐための随時巡回警備

夕方明日の出動を約し解散する。その直後、甲東地区担当の副団長から本部の命令で明日（19日）9時に消防局の北側駐車場へ一斉に集結するよう直接電話があり、直ちに分団幹部に連絡を取る。翌朝19日（水）さすがに日が経つにつれて、事態の深刻さと疲れで団員の心も高ぶっていた。地元の現状を見て出動者全員が地元を離れることの責任を痛感した。明らかに、市民の混乱を招くかも知れない。時が時だけに、きついお吐りを覚悟で、今日の出動者を2班に分けて、1班は地元に残り防災活動に従事し、班長を指揮者とする12名を配置することとした。もう1班は、分団長以下4名で消防局へ直行した。伝統ある西宮市消防団としても、この非常時に直面し、木嶋団長の重大決意は計り知れないものがあると思うとき、自ら身が引き締まる思いであった。混乱する交通事情の為、5キロ程度の道のりをしかも緊急自動車、他の分団車両と現場に合流したのは1時間も過ぎていた。直ちに団本部、消防署員から状況説明を受けると共に救助活動の指示があり、各分団車両は各々消防署の指令車による先導を受けて現地に急行し、被災者の生存又は避難先の確認あるいは倒壊家屋の撤去作業に従事した。我が上ヶ原分団は、神呪分団と共に最初は夙川方面に出動し、避難先の確認と道路上の瓦礫の除去等を行った。終わり次第、再び先導車に従い、待機場所へ引き揚げた。暫くして、国道2号線夙川西の建石地区で瓦礫の下に生存者ありとの連絡で出動し、搜索を繰り返したが、誤報とのことであった。次は、夙川堤防東の国道より南側の住宅地で、二重火災の発生による応援出動であった。停滞する道路事情の中で、国道における大がかりな交通規制

と機動隊員の適切な誘導によるとはいえ、ひしめく他府県の緊急車はもとより、市内33分団の車両の潰れそうなサイレンの音が交錯し、緊張と焦燥の中で活動に終始した一日であった。現場の状況と各分団の作業には少々ずれはあったが、17時頃終了した。身体の疲労は極限に達していた。

しかし、団本部では明日からの消防団としての救援活動の骨子が計画されていた。急遽分団長会議が開かれ、消防自動車による給水活動と位置付けられ、各分団毎に日割りによる出動体制を取ることとなった。1月21日上ヶ原分団の給水活動である。団員の全てが被災し、また親戚が被災し、その安否を気遣う中での出動要請のため、出動団員の理解と協力を頂いたことは云うまでもない。消防自動車にタンクを積載し、指定された給水場へ直行し、水道局の指示によりタンクに水を受け、初日は分団地域内の避難場所へと急行した。気付いたことは、中学校等の大きな避難場所は他府県の応援隊のタンク車が複数待機していたので、我が分団は、水不足で非常に困っている場所に目を付け、その地域に重点を置くことにした。まず仁川町6丁目、五ヶ山、仁川百合町、上ヶ原四番町、七番町、十番町、上ヶ原山田町、新甲陽町といずれも避難場所とはあまりにも遠く高台にあり、高齢者には全く危険な地区である。地の利を生かして迅速且つ有効な給水活動を行うことができた。団本部との連絡を取りながら、自治会等の給水要請を受け、また他分団の応援も頂きながら給水活動は2月20日まで続いた。

確かに他人事では済まされない。またしてもサハリンにも大型地震が発生した。想像を絶する直下型大地震は数々の面で貴重な体験と反省と全く見知らぬ人々との温かい心のふれあいに接し、また近隣の誠の思いやりに感激し、更には私自身消防団員として、こういう事態こそ上司と分団員との意志の疎通を図ることが重要と痛感した次第であった。

いつまでも嘆いてばかりいられない。自分から復興に向けて全力を捧げたいと思う。

※ 山田分団長におかれましては、この手記を病床で書かれ7月消防団本部に郵送いただきました。そして、消防団の手記ができあがれば見せて欲しい旨の言葉を残し、9月9日永眠されました。ここに、日頃のご労苦を感謝申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

大地震の体験

高木分団分団長 古塚 貞雄

恐怖の1月17日、朝、5時46分大地震で目が覚める。最初は縦揺れが来て、3度目は下から揺れ身体が地に浮いた。こんな地震は初めてだ。これは危ないとすぐに頭から布団を被ったとたんに2階が崩れ落ちる音がし、私は1階に寝ていたので音と共に隙間に入り、身体を小さく曲げ潜んでいました。その上から土壁と瓦が落ちてきましたが、私には当たらず助かりました。2階で寝ていた妻と息子と娘の事が気になり、私は1階の隙間からかすかな声で2階に向かって叫びました。そうすると、息子が2階の皆は無事だからと叫んでくれたので安心しました。でも、私自身は一步なりとも動けません・・・。

そして数時間が経過したとき、息子と近所の人々が助けに来てくれました。私は、家族の中で一番最後に救助してもらい、家族全員の無事な顔を見てほっとしました。そして、辺りを見渡すと沢山の家が全壊し、また、火災やガス漏れがひどく、団員達が一生懸命消火と救助に当たり、夜も眠らずに巡回してくれました。

——本当に大変な一日でした——

「もう二度と起こらないことを願います。」

地震で犠牲となられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

平成7年1月17日を振り返って

上甲子園分団分団長 茂木 清

それは突然何の前触れもなく、1月17日午前5時46分、私たちを地面の底から一撃の「ドン」という音と共に襲ってきた阪神・淡路大震災でありました。これは、誰も経験したことのない未曾有の大災害でした。上甲子園分団の活動範囲においても、前日と全く違った光景が、朝の開ける光の下でまざまざと見せつけられる結果となってしまった。地区内では、全壊60軒、半壊120軒、一部損壊280軒の被害を受けたにも関わらず、あの朝は、自分たち周辺の災害の大きさに驚くと共に、次に来るかも知れない余震に怯えながら、倒壊家屋の下敷きになっている人達の救出に、団員各人が各々の住居周辺で活動していたことはいまでもありません。団員の話によると、

「救出したにも関わらず、死亡された人、その家族と共に涙し、次の救出に我が身を奮い立たせた。」

とか

「梁の下敷きになって重傷を負っている人に頑張るよう声を張り上げても、砂塵の中で命の灯が遠くなっていく姿を見て、一人の人間の力のなさを思い知らされた。」

等々言葉に言い表せない現実を各団員が経験することになった。しかし、この騒動の中でけが人や遺体の搬送先は、病院と分かっているものの、多くの怪我人にどう対処すべきか分からず、各団員が110番、団本部、消防局、消防署に電話するも、全て話し中でか呼び出し音のみで会話ができなかったと聞く。止むなくその家人や近隣の人が病院に送っていたようである。

災害発生後1時間前後だと記憶しているが、小林班長と数人の団員が、消防自動車で私の家へ来て、

「広田地区で大きな火災が発生しているらしく、出動要請があった。」

と私に出動の了解を求めに来た。分団長の私は、

5名程度で出動することを了解し、赤色灯を回転させサイレンを鳴らして出動しようとしたとき、近所の人達が、

「あの家屋の下に母親が埋まっているので助けてください。」

とか

「怪我人がいるので運んでほしい」

とか声をかけられるが、この地域より広田地域の方が大変らしいので、とにかく1度出動させていただきをお願いしながら、近隣地域の惨状が気になるものの出動することにした。国道2号線瓦木交差点を北上し、広田地区へ向かおうとしたが、JR陸橋の登り口で車は完全に渋滞に巻き込まれ、前にも後ろにも進めることが困難になってきた。広田地区へいつ着けるか分からない状況の中で、広田の人達には申し訳ないが、自分たちの地域の人命救助にあたるのが大切と判断し、広田地区を断念し、次の防災指令に備え車を車庫に戻し、各人の住居地区で救出活動することにした。

地震発生後1時間30分頃だと記憶しているが、
「火事だー！」

との叫び声で振り返り見上げると、私の家の1軒おいた西側の倒壊した文化住宅の南側から真っ黒な煙と赤い炎が我が物顔で立ち上がっていた。周囲にいた団員に私が指示し、車庫へ駆けつける者、又、火事現場の整理にあたる者と自然に分散し、分団の消防自動車が来るのを待ったが、その間苛立ちを覚えるほど長い時間が経過したように思える。そして、安江部長が消火栓の筒先とホースを持って駆けつけてきた。すぐさま消火栓に接続し、バルブを全開にしたが、圧力がなく全く役に立たなかった。今思えば、当たり前のことではあったが、その時は全く気が付かぬまま接続していた。そこに、サイレンとともに小曾根分団が応援に来てくれた。どれだけ有り難く思ったか知れませんが、水利を上甲子園ビューハイスマンションの防火水槽から取り、消火にあたったが、火の勢いは強く、文化住宅の南側から北側へと燃え広がっていった。そこへ放水が開始された。数分後、我が上甲子園

分団の車が到着したので、各団員は奮い立ち各々の持ち場へ展開した。水利を防火水槽としたが、火勢が北へ北へと燃え広がって行った。このため、北側道路下の河川より取水を決定。水量が少なく、吸管が浮き上がり給水できないため、止むなく倒壊家屋の木材等にビニールシートをかけることにより、水位を上げ消火活動ができるようになった。この間、何分経ったか分からないが、火事の勢いと合わせるように日頃の訓練の成果が現れ、私の指示に従い団員はテキパキとした行動で放水できたが、2分団の放水では収まりが付かないほど火勢が大きくなっていた。この頃になると、周辺全域で消防、救急車、警察、企業車等のサイレンの音がけたたましく鳴り響き、全ての車両がこの火事場に来てくれるのかと想像してしまうほどでした。消防局、署、津門、今津、甲子園口分団と応援車両が増え、いつの間にか猪名川町の消防車が到着して応援していただいたのには本当に驚いた。

皆様のお陰で、午前8時30分頃から午後10時頃までかかりましたが鎮火でき、倒壊した文化住宅1棟だけで済んだことを本当によかったと言葉では言い表せないほど感謝しています。日頃、消防団活動を行っている私たちは、なかなか活動の中身について理解してもらえなかったのですが、今回の震災で私たちの活動を目の前で見えていただいた近隣の人達に熱いアピールが出来たことは、今後の消防団活動の温かい理解が得られるのではないかと考える。鎮火を確認し、応援車両が帰った後、再失火を警戒するため、車両と数人を残し、他の団員は各々の家の整理と片づけに帰宅させることとし、朝の明けたときからの活動で、家の状況すらはっきりと分からず、無我夢中の一日でした。家族をおいての活動で、ご家族のご心配はいかほどのものであるかを考えると、この地震への憎しみが増長しているほどである。

余震・火災等の災害が予想されるため、夜警を行うこととした。夜警をしている際には、消防団本部からのおにぎりの差し入れでお腹も心もホッとしたことを覚えている。その夜の活動としては、

鎮火したはずの上甲子園の火災現場で、倒壊した1階の布団等夜具が再出火し、その消火活動の出動と阪急北口駅東側の高架下の南北道路が水没し、その排水処理を本部から依頼され、高木分団及び芦原分団とともに排水した2件でした。

余震が続く中、平成7年1月17日の長い一日が終わり、振り返って見れば団員とその家族にも大きな怪我人も出ずに無事に一日を終えたとき、改めてこの日の恐ろしかったことを思った。掛け替えのないこの日、消防団の制服、ヘルメットに集まってくれた近隣の何人かの学生や若い人や、又ご老人に至るまで自然体で手を貸してくれ、応援をしてくれた方々に感謝し、名前も分からず手助けをしてくれた人達を忘れることは出来ません。本当に終生忘れることなく、今後の消防団活動に日常の社会活動に素直に生かしていきたいと思います。

身体中疲労の固まりであっても、改めて消防団に入団していて、今災害時の救援活動に参画できたことに喜びと感謝の気持ちを感じずにはられません。

地震体験記

鳴尾中分団分団長 喜田 利竹

平成7年1月17日午前5時46分ドーンと言う音と共に続け様にドンドンと3回か4回位上下に揺れた。それで目が覚め、起きるが立てない。そうすると、すぐに横に揺れだした。大変長く思ったが、後で聞けばわずか5～6秒位だと云う。揺れが止まったのですぐに団服を着て、車庫へ走った。電話で分団員を呼ぼうとしたが、電話が不通になっていた。そのうちに誰かが来て、

「鳴尾市場の裏の家が潰れている。」

と言ってきたので、すぐにそちらの方へ行く。着くと、鳴尾消防署長以下近所の人や消防署員で救出作業を行っており、分団員と共に救出作業に入る。西側の家に埋もれていた男女2人は助かった

が、東川の家の人達は亡くなっていた。その後、阪神電車線路の側の家で、おばあさんが下敷きになっているとのことで、すぐにその場所に行く。すると、2階が傾いており、おばあさんは2階の押入の中に転がっていて、怪我もなく救急隊員の人達の手で病院に連れていってもらった。その時は、鳴尾中分団と小曽根分団の2分団でした。その次は、鳴尾小学校前の家が潰れて、中国の女性留学生がベッドで圧死していました。鳴尾消防署長以下鳴尾中分団員、鳴尾東分団員共同で死体を出す。その後、団長が来られて、全員消防局へ行くように命令されたので、すぐに消防局へ行き、その指揮下に入る。17日は安井町にて残火処理をして午後10時過ぎに帰る。翌朝、消防局に集合。指揮下に入り救出作業に入る。夜9時30分帰途につく。19日、右に同じ。鳴尾東分団と共に郷免町他へ救出作業に行く。20日に至り、消防自動車に給水タンクを積み飲料水を配る。21日には給水タンクを1トンに積みかえて枝川団地、浜甲団地、五町会等に配る。その後1ヶ月で終わる。

阪神大震災を振り返って

鳴尾北分団分団長 井上 義夫

毎日雨の日以外は、約1万歩を歩いているので、1月17日の日も5時30分過ぎに目が覚めて、そろそろ起きる時間だと思いながら布団の上で座っていたところ、突然物凄い揺れで立つことも出来ず、布団の上でうずくまっていた。揺れていた時間は短くても、私には凄く長く感じました。又、今までに経験したことのない大きな揺れに、頭の中で何も考えることが出来ず、ただ恐ろしさだけでした。揺れは止まりましたが、電気が消えて暗がりの中で家内を呼ぶと返事をしたので、無事だと分かりホッとしました。家の中では、全ての物が倒れている様子なのですが、暗くてどうすることも出来ず、少し明るくなるまで待ちました。いくらか分かるようになってよく見ると、驚いたこ

とに狭い家中足の踏み場もないくらい散らばっていました。それよりも私がうずくまっていた場所の17センチ右側に幅3メートルのアルミ製の大きな本棚が倒れてきており、又家内が寝ていた所へはテレビとその後ろにあった本箱が飛んできており、そのまま寝ていたら2人とも下敷きになっていたと思うと、地震の恐ろしさが身にしみて分かりました。何から手をつけて良いのやらただ茫然としていると、門戸に住んでいる息子が高校生の孫を連れて来てくれました。甲子園の家は古いので、多分倒壊したのではないかと心配して来てくれたのでした。自分たちが住んでいるマンションは半壊で、もう住めないそうです。

少し気持ちが落ち着いてきたので、表へ出してみました。すると、西の方で北から南へと黒煙が凄いのので、すぐ家内に火事だから出動すると後を頼んで詰所へ走りました。停電なのでサイレンを鳴らすことも出来ず、団員の家に連絡しました。詰所へ来てみると、屋根瓦は飛び、モルタルの壁は落ち、ガレージのシャッターは開かない状態でした。それも何とか無理に開けて火災現場へ急ぎました。甲子園五番町の現場に着き、消火栓から水を出そうとしたのですが、消火栓は水が出ません。火の手は既に2階の天井に達していました。やっと、井戸を見つけ放水しましたが、とても1分団では鎮火するのは大変です。そこで東と西から二線放水をしたのですが、既に隣家に燃え移っています。どれ位時間が経ったのか何とか下火になった時、消防署から花園町で倒壊した家の中に人がいるというので、そちらの方へ行って手伝っていたところ、また燃えだしたとの知らせで数名が急行して消火に当たりました。花園町では遺体を収容しました。当日は、午前2時まで詰所で待機しました。18日は午前9時に西宮消防署に集合し、それから各分団が救助場所の指示を受けたのですが、自分たちは屋敷町へ行くよう指示があり、消防署員と共に出動しました。現場に着いてみて、その付近の殆どの家が倒壊しており、改めて地震の恐ろしさが分かりました。他県からの警察も応

援に来てくれており、早速救助活動を始め、夕方までに2遺体を収容しました。19日は、津門宝津町付近で1日中倒壊家屋の救助活動をしました。20日からは、毎日給水に出動する事になり、団員が交替で出動しました。暫くの間は地元で給水をしていましたが、少し水が出るようになってきたので、他分団の応援に行きました。特に浜甲子園の団地では、5階まで水を運ぶ姿を見て1回でも多く水を持ってきてあげたい気持ちになりました。地震まで平日頃何とも思わず水を使っていた自分たちも、この時ばかりは水の有り難さをつくづく感じさせられました。

こうして2月20日で給水も終わりましたが、今回の阪神大震災で少しでも役に立てた喜びと又自分の家庭も顧みず出動に協力してくれた団員に感謝しています。

場に消防団長が見え直ちに消防局へ行き局の指示に従ってくれとの事。消防局の指示で広田町へ行くが、想像を絶する地獄絵で倒壊した家が行き先をふさぎ車では進めず車をそこに置き歩いて現場に着き、近所の方々に生き埋めになっている倒壊した2軒の家を教えてもらい団員を2ヶ所に分散して救助活動をしたが、1ヶ所は1階がつぶれ2階の窓から入り1階の寝室に居られた男性を救出するが既に死亡、直ちに運びだす。他の1ヶ所は夫婦の方で家屋が手前に8度から10度傾いている。10tジャッキ2台で家を持ち上げ角材3本で支え根太を切り畳を切り救出するが既に息絶えていた。救急車もなく分団の車で渡辺病院へ搬送、検死を受けて西宮体育館の遺体安置所に運ぶ。

阪神大震災に思う

名来分団分団長 木田 佳文

平成7年1月17日早朝、突然起こった災難から約40日が過ぎ、これでベストを尽くしたかの疑問に思うこの頃である。というのは、私が属する西宮市消防団名来分団に出動命令が伝わったのは、17日昼12時10分頃、電話が通じないので、北消防署山口分署の職員が車で伝達に回り、やっと伝わったのである。西宮の最も北部に位置するのが山口町名来（市役所へは来るまで40分、有馬温泉から北へ4キロ中国自動車道西宮北インターチェンジのあるところ）である。ここでは、屋根瓦のずれたところはあるが、建物の倒壊は1軒もないので、携帯ラジオの報道は一部のひどいところを大げさに伝えているとしか思えなかった。それが電気が通り、テレビの映像からして、

「大変な状態になっているぞ！」

と思えたのは、地震発生より数時間経った後である。消防署からの出動要請の第1連絡所は我が家になっている。私は、司法書士事務所を営んでおり、午前中は事務所内で本棚よりこぼれた本や書類の整理をしていたが、いっこうに署から電話が

1月17日午前5時46分

鳴尾西分団分団長 石野 吉英

起床し顔を洗っていた時ドーンと下から突き上げるのと同時に激しい横揺れがあり、外に出て見ると道路が大きく波打ってガスの臭いがしており大急ぎで分団服を着て自転車で区域内を巡回した。この周辺では余り家屋の被害はない。急ぎ八車副団長へ電話したが不通だったので、自転車にて副団長の家へ行ったところ奥さんの言によると、

「鳴尾5丁目にて木造2階建ての家が倒壊しているの、応援を頼むと言って出て行きました。」

との事。大急ぎで分団に帰り車庫を開けサイレンを鳴らし分団員を招集。消防車で鳴尾5丁目鳴尾西市場南直行、2階建て木造住宅が倒壊し2人が下敷きとなり鳴尾消防署、鳴尾中分団、鳴尾東分団と協力し救出したが既に死亡していた。残念だった。同じ地区の国道43号線沿いの2階建て木造住宅も倒壊、一人の方が下敷きになっている。何とか救出したが既に死亡していた。この時、現

かからない。おかしいなあとは思ったが、電話がパニックになっているとは思えなかった。それが前記の時間である。来た署員との会話は、

「消防本部へ集合するため出動してください。

山口町の各分団は一緒に行こうと思うので、12時30分までに山口分署前に来てください。」

「それでは、団員に電話連絡するのも時間がかかるので、火事と同様消防器具庫のサイレンを鳴らしてもよろしいね。」

「それで結構です。」

この会話でも、まだ電話が通じないとは思っていない。時間がないので、慌てて器具庫に走り、サイレンを鳴らした。鳴らすとき思ったのは、分団員20名のうち、自営業の団員は4名。さて何人集まるか、最悪の時は団員である弟と2人でも出動しようと思った。サイレンを鳴らすと、直ぐに2人が集まった。ロープや鳶口を余分に積み、約10分経過後、『12時30分出発 集合場所西宮消防本部』と黒板に書き、当時は部長であった私が指揮者になり、乗車人員7名で名来分団の消防自動車は出発した。山口分署前では、他の分団が既に出発した後だったので、独自のルートで目的地に行くことにした。下山口から金仙寺を通して進んだ。同じ山口町ではあるが、船坂にかかるや目に入る被害の状況は一変した。道路には、大きな亀裂が入り、家が倒れているのを見たのは船坂が最初である。西宮市街地へ抜ける盤滝トンネルは通行止めになっており、急な峠の参道を上り始めると、北に広がる低い山の頂に立っている関西電力の高圧線の鉄塔が、根本から倒れているのが見えた。又、道路に山から大石が落ち、それがダンプにぶつかり、そのダンプがハンドルを切り損ね、道路の山側にぶつかって放置されていたりで、だんだん容易ならざる状態（身の危険）が実感として湧いてきたのは、盤滝の山を越え、逆瀬川横の県道を下り、西宮カントリークラブの付近まで来た頃からである。ここで、回転灯に加え、自動車のサイレンを鳴らし始めた。消防自動車は北山公園を真っ直ぐ下り、名次町の大きな自然石を積んだ邸

宅の石積みが道路の半分を塞いでいるところを通り過ぎ、阪急神戸線の高架下を過ぎると、直ぐ前方のところで壊れた建物が道路を塞いでおり、やむなく線路沿いに西に向かった。夙川堤防に突き当たったところを南に堤防沿いに国道2号線まで走った。途中、道路真ん中で大きく亀裂が入り、道が上下段違いになったところで数人が飛び出し、この自動車を止めた。

「あのマンションの下に数人の者が生き埋めになっているんだ。人手が足りないので助けてほしい。」

既に容易ならざる事態を来る道中で見てきたので、ここだけではないと思い、

「我々は消防本部に集合し、指示された現場に向かうことになるので、消防本部に出動の依頼をして欲しい。」

と私は言った。そして、消防自動車を発車するよう運転者に言った。すると、

「電話は通じないし、困っているんだ。消防車の無線を使い本部に連絡を取って欲しい。」

その人達は、消防団の車に無線が付いていると思っている。

「受信しかできないので、至急本部へ行き、連絡するから暫く待って欲しい。」

と言いつ残しその場を離れた。間もなく入った国道2号線は車で溢れ、まともには走れる状態ではなかった。私は、運転している者に中央分離帯を越え、空いている反対車線の走行を指示し、モーターサイレンやクラクションやマイクを有効に使って迅速に本部に到達することが出来た。消防本部への到着は午後1時20分過ぎだと思う。

■ 1月17日の活動状況

（名来分団で解散したのは翌日午前2時）

死亡者 3体（消防署員と共同作業）

生存者 1名（名来分団単独活動・文化住宅に住む老婆を救出）

■ 1月18日の活動状況

死亡者 1体（消防署員と共同作業）

生存者 1名（消防署員との共同作業。当初

から絶望視されていたが、奇跡的に生存救出)

■ 1月19日の活動状況

死亡者 1体(他の分団との共同作業)

■ 救出やその後の給水活動についての所感

- ・十分な安全確認により、二次災害は絶対防がねばならない。これは分団のリーダーの責任である。
- ・消防団員は、色々な職業の集まりであり、非常時にはその能力や各個人の所有する道具をうまく利用する。そのためには、常日頃から人助け、即ちボランティアの精神を高めるようリーダーは努めなければならない。
- ・我々を支持してくれるのは市民であり、その市民の希望を取り入れた活動をやるべきである。市民を優先した消防団であるべきである。

■ 名来分団の工夫

- ・団員より提供のチェンソーや足場パイプを使用し、救出活動を18日から行った。
- ・消防自動車にタンクを積んでの給水は、担当地区内を移動し給水場所を知らせた。特に、老人が多く住む地域を重点に移動させる。(避難所には自衛隊や救援の給水車が来ている。)
- ・ペットボトルの口は小さいので、まず衣服整理用プラスチックの入れ物に水を流し込み電池式ポンプで各人が自分でペットボトルに水を入れてもらい、入れにくさから来る長蛇の列を防いだ。
- ・給水要員は必要最低要員とし、会社等の勤務の差し障りにならないようあらかじめ都合を聞き、公平に参加してもらった。万一、都合が悪くなれば、お互いに代わってもらうことにした。

便利のよい生活に慣れすぎ、電話の件もしかり、震災の状況が現場に着くまでほとんど分からなかった。又、普段、口に出して聞き流せることでも、この非常時に一部の若い団員の火事場泥棒的な意味の冗談混じりの会話が耳に残った。千年に1度巡り来るこの地震は、私にとって貴重な体験

をさせてもらった。これを喜ぶべきか、悲しむべきか。3日間連続で会社を休み、救出活動に参加してくれた若い兄弟の団員さん、どうも有り難うございました。

防災活動日記

上山口分団分団長 上谷 良一

地震といえば、関東や東海地方に起こるもので、関西には大きな地震はないものと思っていただけに、まさか大地震とは思いませんでした。今回、阪神間を直撃した巨大地震、わずか30秒弱の激動で、西宮南部地域を一変させました。北部山口地域の被害は、家屋の全半壊は一部ありましたが、屋根瓦の崩れ、塀の倒壊等被害は比較的軽微でした。私は、家族全員2階に寝ていましたが、突然ドーンと突き上げられ、それから東西方向へ激しい横揺れに何が起きたのかよくわからず、揺れが収まると真っ暗闇の中、家族全員外に出て、我が家、近所を見渡すと、屋根瓦が崩れ落ち、ブロック塀が倒れ道に散乱したのを発見、私は、地区内で大きな被害が発生しているのではと思い、すぐに団員を召集するにも、電気、電話は使用できない状況で、三役から各班長へ団員召集の連絡を指示し、6時30分に27名の団員召集を完了した。数名の団員と消防自動車で巡回しながら被害状況の調査、他の団員を5名ごとに編成し、徒歩で被害状況の調査と、老人だけの世帯へ安否の確認を実施しました。被害状況を確認した結果、負傷者は一人もなく安心しましたが、屋根瓦の被害が大きかったほか、塀の倒壊が数ヶ所、灯籠、墓石はほとんど壊れ、特に、明徳寺の山門付近が老朽化のためか、大きな被害が見られました。7時過ぎから、道路に散乱した障害物の除去を、自治会役員の協力を得て作業を終了し、団員は自宅待機、幹部で正午まで警戒を実施しました。正午過ぎ、西宮南部地域へ救助活動の出動要請を受け、団員6名を地元に残し、金仙寺班と合流し、車両2台、

団員25名でいち早く出動し、消防局へ向かいました。しかし、盤滝トンネルは中央部2カ所崩落で通行止め、旧道の山越え道へ迂回し、阪急甲陽線の踏切付近にさしかかると、道路の陥没、電柱の傾き、倒壊した家屋、救助を求める人々の声、道路は人と車で溢れかえり、始めてみたパニック状態の光景に、ひどいなと云う言葉の他はなかった。早く消防局へ行かなければという焦りはあるが、車は思うように進めない。迂回を重ねながら、国道2号線に入り、消防局へ到着するまで通常の2倍以上の時間を要しました。機材、人員報告後、消防職員1名の同乗を得て、13時30分から21時30分、約8時間、分団の2車両は、救助現場ごとに分かれ倒壊現場の救出作業に向かった。先ず、弓場町、郷免町、安井町の救出作業、建物に一步入ると、手が付けられないほど傷んでいる。ボール、鋸、ロープの機材しか使えず、廃材は人力の手作業で取り除き、作業は難航し救出に3時間余り要したが、計4人を遺体で救出、引き続き、午後4時段上町、名次町のほか2箇所の現場へ出動、日没と大渋滞が重なり、現場着は周りは薄暗くなり、避難されていて、家族や近くの人も見当たらず、家屋のどの場所で、救助するかも判らず、また手作業では無理な状況でした。大声で呼びかけ安否を確かめましたが、応答が無く、仕方なく救助を断念しました。消防局へ引き揚げ、午後9時30分、解散の指示があり、分団器具庫へ着いたのは、午後10時30分全員疲労の様子が見えた。地元の炊き出しを食べながら、今日一日の出来事について話し合い、南部地域の大被害を見て山口町も被害はあったが、まだ幸せ、いつまで続くか分からないが、被災者の救援に精一杯頑張ると誓い合った。また、柱等材木の解体に手間取るためチェーンソーと鋸を団員から借用し、明日からの救助活動の準備をしました。

18日午前8時、段上分団器具庫へ到着、上大市2丁目、新幹線高架橋近くの2箇所の現場を午後5時30分まで救助作業を続けました。最初に、農家の大きな家屋、全壊し屋根部分がそのまま覆い

被さる状態であった。先ず、瓦の除去作業から始めたが、時間もかかりチェーンソー等を使い手作業で解体物を除去、午後1時頃まで作業が続き、1階から老夫婦が遺体で救出。次の現場は、2階建て木造瓦葺きで14世帯のアパート、消防局から被災者2人の氏名も聞いていましたが、現場に着き救出作業を始めるにも、建物の中のどの場所にいるのか判らない。付近の人に聞いても、明確な返答が得られない。30分ほど過ぎた頃、詳しい方の説明で現場が確認でき救助作業に取りかかる。1人は立柱の直下に下敷きになっており、消防自動車のジャッキでは間に合わず、近くで救出作業をしていた自衛隊に依頼し、ジャッキと2名の応援を得て、遺体で2人救出しました。19日、消防レスキュー隊と合同で、能登町、段上町の救助活動を行う。やはり地震発生から3日目ともなれば、救出困難な現場が多くなる。能登町の現場は、木造2階建ての集合住宅、作業人員は33名で、昨日までと同じような方法で老人一人の遺体を救出しました。段上町6丁目の現場は、鉄骨コンクリート造りのアパートで、隊員は、ハンマー、エンジンカッター等の資材を使用して作業を進め、団員は解体した瓦礫の除去作業、出勤寸前の様子の中年の男性1人を遺体で救出。

災害発生から3日以内が人命救助の鍵だといわれ、その危機感を持ちながら消防団と消防局との連携活動、自衛隊、警察、住民等の支援もあり、懸命な救助活動が続き、救助者も後少しの状況となった。

消防団は、3日間続けた救助活動を終え、20日以後は給水活動を実施することになりました。消防自動車に500ℓ～1tの簡易タンクを積載し、2月20日まで1ヶ月間給水活動を続けました。毎朝8時30分に分団車庫を出発し、南部市街地への道路は、芦有道路を利用するなどしましたが、大渋滞が続きました。また、山間道路のため、朝夕には道路の凍結があり、危険なときもありました。消防団本部から10日間毎に給水地区の指示を受け、毎日鯨池浄水場と給水地区までの水の輸送には、道路の事情が悪く、迂回路を探しながら行くため、

1日6～7回の給水が限度でした。給水地区を巡回し、時には被災者から疲労といらだちの言葉を聞いたこともありましたが、団員は被災された方々に励ましの言葉をかけ、特に、老人には飲料水を自宅まで何回となく届けました。団員もできる限りの努力を続けたところ、被災者の感謝の気持ちが伝わり、お互いに助け合うことが大切だと再認識しました。この救助活動と給水活動を続けた1ヶ月間は、過去にない体験の場でありました。

今回の震災で上山口分団は、救助・給水活動に延べ192名出動しました。西宮市でも、1,010名もの命が奪われ、また倒壊による負傷者、避難者等過去にない災害が発生したことにより、非常に大きな課題を突き付けたと思っております。関西に地震はないという気のゆるみのところへ、地震発生、その直後、非常召集、情報伝達、避難誘導、救助など今回のような非常事態が発生すると、気が動転してしまい、消火や救出、救援活動が思うに任せず、計画通りにことは運ばなかった。災害はいつ起こるか分からない。適切に対応するためにも、今回の地震を教訓として、防災訓練の見直しをしなければならないと思います。また、瓦礫に埋まった人々を救出しようにも、スコップ、鋸、バール、チェーンソー、ジャッキなどが有効な手段であったかも分かりませんが、私は、資機材の一部を地域の防災拠点となる小・中学校に備えて、資機材の増強を図ってはどうかと思います。また、クレーン車、バックホー等建設機械の手配について、消防署や土木事務所に配置すればどうか。また、企業と協力し、緊急時に機械類、資機材の調達を取り決めておくことも必要ではないかと思えます。また、消火活動や救急・救助活動をするには、緊急車両を円滑に運行できる道路の確保が必要だと思えます。道路は至る所で大きな被害、その上大渋滞が発生し、消防自動車、緊急車両も現場に急行できず、被害を大きくする要因の一つと思われる。

今回のような大災害時には、的確な情報の収集と伝達を迅速にすることが重要であります。一般

には、地上中継塔から無線交信する方式のようですが、今後、宇宙空間の通信衛星を使う防災無線が当然必要と思います。その他、緊急時に重要な水の確保、全てのライフラインが被害を受けましたが、今後の防災対策として、上水道、また河川の整備、防火水槽の増設など、様々な見直しが必要であります。最後に、阪神大震災を教訓とし、震災復興に取り組まれる中で、特に、災害に強い防災対策と整備を望みましてペンを置きます。

遠い夢

中野分団分団長 北浦 治

私は戦争の体験はありませんが、戦争を体験された方に聞きますと、あの光景は戦争の時よりも数倍も大きいと言われた方がおられました。私の生まれ育った山口町中野地区は、裏六甲の有馬温泉より北へ約1キロのところにあり、有馬川が流れ、緑の多い田舎です。あの日17日は、生涯忘れることの出来ない日であります。私は、毎朝5時半過ぎに起きるのですが、当日は何故か5時過ぎに目が覚め、トイレに立ち、その後約10分程ボーッとしていたのですが、その後あの大きな揺れを感じ、すぐに地震とわかりました。

初めはゴーッと地鳴りのような音がしたように思えますが、はっきりと覚えていません。すぐに家の下から何かが揺すっているように見え、ガタガタと大きな音がして、すぐに電気が消え、地震と分かりましたが、誰かが家の外でいたずらをしているようにも思えました。でも、本当に危ないと思い、大きな声で

「地震や！」

と叫び、妻の上にかぶさり、少しの間じっとしていましたが、真っ暗闇の中を懐中電灯をつけ、すぐに作業服、ヘルメット姿で外に飛び出しました。私の家は、公会堂の側ですので、そこへ行くと既に約20名の方が集まっていました。その中に団員もいましたので、川向かいの老夫婦のことが気に

なり、二、三人で駆けつけたところ、主人がタンスの下敷きになっていると言われたので、他の人に頼み、私は器具庫に走り救急車の代わりにと思い、消防自動車でそこへ戻りましたが、何とか無事と言われましたので、器具庫に戻りました。その後、3人4人と団員が自発的に集まりましたので、すぐに徒歩にて地区内を回り、ハンドマイクで

「大丈夫ですか？ガスの元栓を閉めて」

と回りました。一瞬の出来事で、正直言ってなにがどうなったか分かりませんでした。家を飛び出したのは、6時10分頃と思います。団員の一人一人が自発的に集まってくれたのが本当に嬉しく思え、徒歩巡回の後、すぐに車両にて西山地区や付近のパトロールに出ました。この時ほど、団員一人一人の力強さや団結心というものを感じたことはありませんでした。分団長として何かジーンとくるものを覚えました。

それからが大変でした。団員の一人の携帯ラジオからはいる神戸市内の大火の情報や、西宮、芦屋の情報が入る中、本部の指示により消防局への集合の命を受け、私と5名の団員で西宮へ走り、分団器具庫には副分団長を指揮者として待機又は時間的に徒歩調査等に残ってもらいました。私は、市内に入るにつれ、頭の中が何がどうなっているのか真っ白になりました。ラジオの情報よりも遥かに事の大きさに絶する思いがしました。団員の誰もの初めて発した言葉が、

「何やこれ」

の一言でした。しかし、それが現実であり、物語ではありませんでした。消防局に入り本部の指示により、現場へ行き救出活動を開始しましたが、言葉等で表現の出来るものではありませんでした。当日より3日間は救出活動、その後は給水にと走り回りました。電気はもとより、我々人間一人が生きてゆくには、電気、水そして隣近所の方々の温かい心一つ一つが生きてゆく心の支えになっている事が、初めて分かったような気になりました。

給水活動で一番心に残っているのは、一人のおばあちゃんが小さなポット一つを持って、これに

水を一杯でよいから入れて下さいと言われた時です。尋ねると、一人住まいやし、足と腰が痛いので、重いものは持てないとのこと。もっと他に大きい入れ物とは聞くと、あると言われたので家まで行き、給水をして家に運んであげました。帰る時におばあちゃんが私の方に何度も頭を下げ、

「消防の方。有り難う。有り難う。」

と言って両手を合わせていました。おばあちゃんの家は今でも覚えています。あの姿は私の目の奥に焼き付いています。消防団員であって良かったと思い、あの時のことを想い出すと熱いものを感じます。

私は、戦争の体験はありませんが、この震災により見知らぬ方々と語り合うことが出来て、自分で言うのも恥ずかしいのですが、一回り大きくなったように思えます。私の父は戦死したため、顔も覚えていませんが、今は消防団員の一人として、いろんな意味で大きくもなり、少しは人間性が出来てきたように思えます。これからは、戦争とこの大震災を体験した母を大切に、妻を愛し、この生まれ育った中野を愛し、日一日を大事に生きていくことに喜びを感じています。あの日を忘れることなくも遠い夢であって欲しいと思う。

ヘルメットと法被

船坂分団分団長 坂口 文孝

左手は整理筆筒を支え、右手は横に、さながら野球の審判がセーフのゼスチャーをしているような格好で、土埃のなかを1・2・3・4・・・と数えながら、そして、地震が止むと同時に外に飛び出した。本家の棟が落ちているのが目に入ったが、まず3人の子供の安全を確認し、外に出るように言ってから、朝食の準備をしている妻のところへ。もうもうとした埃と割れた食器の中でお互いに大声で安全を確かめ合い、

「おじいちゃんやおばあちゃんは？」

の妻の言葉に棟が落ちていたことを思い出し、取

りあえず妻を子供たちのいる庭へ連れ出した。足元を見ると、素足なのにきずき、安全靴を履きヘルメットを被り、玄関のガラス戸を蹴って開けると、中から

「蹴ったら戸が潰れるがな」

と普段と変わらない声がした。棟が落ちていたので、万が一のことを考えていたが、まずは安心と思いながらも一刻も早く外に出さなくてはと両親を外に出す。一家7人怪我もなく無事であった。6人を庭の真ん中に残し、法被をひっかけて消防詰所へと走る。車庫は無事でシャッターも軽く開いたので、エンジンをかけ巡回に出る準備をする。分団在籍中班長をされ、今は自治会の4班班長の中西さんに同乗してもらい巡回に出た。先ず、善照学園。ほのかに明るくなりかけた中、声をかけると見慣れた子供たちが顔を出してきた。怪我等について聞くと、無いとのことでは安心。西の町、下田、平井垣内を順次巡回する。棟が落ちたような家屋は見あたらず、帰る途中頭部に怪我をした1人を山口町上山口のT外科へ搬送するも医師が見えず、山口分署に搬送を依頼して帰る。もう1人頭に包帯を巻いた人に出会い、怪我の具合を聞くと、自分で行けるとのことであった。詰所へ帰ると何人かの団員が出てきていた。この時点において、何軒かの家屋の損壊はあるが人命については心配が無いことが判った。生活面では、近所の人に聞くと、電気、水道がだめ、ガスは危なくて使えない。薪でご飯が炊けるかと聞くと、

「まかしとき」

と元気のよい答えが返ってきた。腹が減っては戦ができぬのとえに従って、まずは炊き出しの準備に団員はかかった。その頃には自治会の自主防災も機能しはじめていたように思う。ご飯は、薪ではなくプロパンガスで炊かれた。消防自動車で

「公会堂に炊き出しができています。」

と広報しているとき、

「家で使う生活用水がほしい。」

との要請があった。そこで、2トンダンプに1トンのポリ容器を積み、消防自動車で

「飲料水にするときは一度沸かしてからお使いください。」

と広報しながら村内を給水して回った。その山水は、可搬式ポンプを使い池から汲み上げた。この給水活動中に団本部への召集がかかった。給水活動の継続、その他の行動を副分団長はじめ各団員に頼み、分団長以下5名を編成して出動した。県道82号線の山間部は何か所か崖崩れがあったけれど、何とか抜けることができた。市内に近づくにつれて被害は大きく、我々の想像を絶するものであった。ガスの臭いのする中、道を左に右に取りながら進むうちに、人命救助の要請があった。見ると、ビルが傾き、その中に人がいるという。私はここで初めて、ジレンマに一瞬陥った。それは人命救助と召集優先と現場から感じる装備の必要性でした。そして、

「ちょっと待ってください。取りあえず本部へいかなくてもなりませんので。」

の言葉を残し本部に急いだ。本部に着くと、松下町での人命救助に向かえの指令を受け、上山口分団金仙寺班と共に出動する。現場に着くと、該当する家屋からは救出された後であった。近くの民家で電話を借りてその報告をすると共に、出動途中で要請されたビルに向かう許可を得て金仙寺班と転戦する。ビルは1階が駐車場になっている5階建てのマンションであり、2階部分の北側が全壊し、北に傾いている状態になっていた。3名の方が取り残されていると確認に当たったが、お二人については残念な事態で、もうお一人については確認できなかったため、その継続を頼み、お二人の救出作業を始めた。もちろんそれまでに近所の人達が協力をして救出作業はされていた。分団員が作業に加わっても救出作業ははかどらず、どうしても機械力を必要とした。そんなとき、西宮建設協会からの派遣だと思いがM建設、K建設の人達が駆けつけてくれました。お陰で、ドリル、カッター、サーチライト、ユンボ等順次揃い、作業を始めて約6時間後にご遺体を安全なところに搬出することができた。ご遺体の安置場

所を問い合わせたところ、満池谷か市の中央体育館と指示されたので、消防自動車2台で満池谷へお送りした。お二人をお送りして間もなく2回目のジレンマに陥りました。それは残されたもうお一方の捜索です。昼間の確認作業でも居場所の特定ができず、サーチライトのもとでの作業の進め方を考えたとき、全体の状況を把握することが困難であると判断し、関係者に伝えたのですが、なかなか納得してもらえませんでした。それは当然のことで、

「そこまで言われるなら、やりましょう。」
とはどうしても言えなかった。被害状況を報じるテレビからは、

「夜を徹して救出作業が続いている。」
との報道を聞くにつけ何とも表現できない気持ちでした。12時前後になっていたと思うのですが、消防本部からきていただき、事務的な引継と関係者の方に改めて納得していただきました。建設協会の2社の人達も私たちと同じような気持ちで、それまで待機してもらっていたのですが、「明日一番に」を胸に家路につきました。

分団詰所に帰るとみんな待っていてくれました。今日の一日を振り返り、明朝8時集合を伝え、2時頃解散しました。私ともう一人の団員は、船坂公会堂での避難所生活の始まりです。

大震災の体験

生瀬分団分団長 浦入 稔

突然、身体が宙に浮いたと思うと大きな横揺れとなり慌てて飛び起きる。電気が消えて暗がりの中、横に寝ていた妻は倒れた三段重ねの簞笥の下敷きとなっており夢中で簞笥を持ち上げ引きずりだし、階下で休んでいる祖母(84歳)の様子を見に行くとベットで何もわからず寝ていて安心する。辺りを見回すと真横には簞笥や人形ケース等が倒れたり落ちたりして、足の踏み場もない程散乱している。自分は消防団分団長、家の片付けは妻子

に頼み、すぐに団員を非常招集し受持ち区域内の状況把握に出動する。ある団地では至る所でガス漏れがあり消防車で住民に対して、ガス漏れが発生しているので火気を使用しない様に広報させる。区域内の1ヶ所で家が倒壊し4名が下敷きになっているとの連絡があり現場へ急行する。現場に着くと2階建ての家は見るも無惨に押し潰されており警察、消防署員も到着しておらず付近の住民の方々は、なす術もなくただ騒いでいるだけだった。団員と共に救助活動を開始したが、どこから手をつけたらよいのか、廃材置場の様な中での作業を進めていくうちに母親の腰から下が見え、反対側では子供の足首が見えてきた。大声で呼ぶと母親は元気に返事をしてくれ、子供の方は足を動かして答えてくれた。救出作業を進めていくとどうしても土埃がして母親が息苦しいと訴えるので、私は咄嗟に作業を見守っている近所の人にタオルを水で濡らして来てくれる様に頼み、それを母親に渡し口と鼻に当てている様に言い作業を続けた。開始から2時間余りで無事母親を救出し、子供の方は髪の毛が崩れた梁の下敷きになっており髪を切って救出した。到着した救急車で母子2名を病院へ搬送した。残りの子供2名はそれから30分後に救出したが、既に冷たくなっていた。又、この救出活動中に新たに1ヶ所裏山のコンクリート擁壁(高さ5m、幅1m、長さ9m)が崩壊しているとの連絡が入り団員半数を現場へと急行させ救出に当たらせ、私は4名の救出が終わり現場へ行くと消防署員と合同で必至の救出活動中であった。現場を見ると、とても座敷からの救出は無理と判断し床下からの救出に変更するよう指示をし作業を進め、ようやく昼過ぎに救出するも既に息絶えていた。消防団本部より応援に来るよう要請があり、分団役員の奥様方の炊き出しで食事をとり団員3名を連絡要員に置き残り団員33名を消防車2台と自家用車に分乗し消防本部へと走る。本庁に近づくにつれ地震の規模の大きさに改めて驚く。本部に着くと生瀬分団は香炉園地区の救出に行くよう指示され現場へ行く途中、住民の方が私達の

車を止めて、

「この家（倒壊家屋）に、まだ1名いるので助けてくれ！」

と懇願され、それを振り切ってまで行くことはできず、まずそこで作業して次へ進むといった具合で仲々目的地にたどりつく事ができなかった。指示された場所に着くと道路を挟んで反対側の家が6軒並んで倒壊しており、まだ中に逃げ遅れている人が居るという事で、機動隊員4名と合流して救出活動を行なった。現場は2階建ての集合住宅で1階部分が押し潰されており、まず2階の畳を取り除き床板や梁、1階の天井板を取り、倒れている簀笥を裏から壊し中の衣類を引張り出した。簀笥の引出を取り払うと手が見え、その下から簀笥を支えるような形で遺体が見つかり担架もないので畳に乗せて運びだした。この現場では3名の尊い命を救出する事ができた。この後は、他所で作業をしている団員と合流し、ここでも4名を救出したが、3名の方は亡くなっていた。最後に救出した84歳の老女の方は、生存が確認されての救出活動だったので活気がみなぎっていた。それ以上に救出活動を見守っておられた家族の皆さんの喜び様は言い表せないものがあり、改めて命の尊さを知らされる。慎重に作業を進め無事救出し、救急車がないので消防車にて県立西宮病院へ搬送した後、消防局へ引上げたとき時計の針は午後11時を指していた。遅い夕食は、おにぎり1人1個であったが分団員一人として不平不満を言わずによく頑張ってくれた。その直後、団長より生瀬分団の1車輛は津門分団と共に津門協立病院に急行し、三田市よりの救援給水車の水を屋上タンクまでポンプアップする様指示を受ける。直ちに協立病院に急行する。断水のため屋上タンクの水は既に消費給水車の水では圧力なき為、手術等が出来ないのではポンプ車を要請したとの事である。津門分団と協力積載している「トーハツ」小型ポンプを有効に利用して屋上タンクに送水することに成功した。足の踏み場もない位の負傷者何人とか早く十分な治療が出来る様にせねばと気が焦るばかりであった。任務を終え分団車庫にたどりついたのが真夜中の2時でした。一度に色々な体験をした本当に長い日々一日でした。翌18、19日は、朝8時より市の防災中心部へ応援、土埃や瓦礫の中での救助活動でしたが、分団員誰一人として不満を漏らさずに黙々と活動してくれたのには敬意を表します。20日からは消防自動車に1tの水タンクを積み給水活動、主に市が設けている給水場所より遠く離れている所への給水で特に、老人世帯の人達には大変喜んでいただいた。2月20日まで実施、この時ほど普段何げなく使っていた水の有難さが身に染みてよくわかりました。

今度の反省として

- 消防車1台に「担架」 1基
- 原動機の「チェンソー」1台 を設備

出来ないものかと思います。

震災体験記

名塩分団分団長 家門 一男

1月15日早朝、名塩八幡神社境内での分団出初式で、中条前分団長の訓示があり、平成6年度の無事を感謝し、7年度の団員の活躍と健康を祈念して、無事出初式が終了した。この時、2日後の同時刻に、あの悪夢のような大震災が起きようとは、団員の誰が予測し得ただろう。出初式終了後、分団の視察旅行に出発。本年は能登半島方面。2日間の日程を終え、16日午後8時頃無事帰宅。短い時間であったが、久しぶりの孫との楽しいひとときが過ぎ、娘家族は、嬉しそうに土産物を持って帰っていった。と、同時に床につく。激しい揺れと、2階から物が落ちる音で目が覚めた。すぐ地震と解り携帯ラジオのスイッチを入れ、震源地は淡路島と解ったが、被害状況は全く解らぬまま数時間が過ぎる。その後は、新聞、ラジオ等の詳しい報道のとおりである。団員召集のサイレンが鳴り出動。救出活動のため、消防車3台に分乗して市内へ向かう。この時点では、市内のあの惨状

は団員の誰しも知る由もなかった。名塩分団詰所前の国道176号線も既に大変な渋滞である。サイレンを鳴らし、反対車線を安全確認しつつ武庫川堤防まで出る。所々で陥没、通行危険なところを慎重に走り、ようやく国道2号線に出た。ここも大変な渋滞。ここに来て、初めて見る災害現場。余りの悲惨な現状を目の当たりにして、団員一同は言葉もなく、胸が締め付けられる思いだった。赤色灯を付け、サイレンを鳴らし、やっと西宮消防署に到着。署の前の国道2号線は、大渋滞。避難する人々、被災地へ駆けつける人々で、歩道も大混雑であった。ふと、あの戦災の時の光景がよみがえった。待機する間もなく、名塩分団の出動場所が決まり、屋敷町方面の現場へ向かう。指定された現場周辺の家屋は全壊だった。現場に到着するのを待つかのように、17、8歳程の娘さんが、名前を名乗り

「私の家族が生き埋めになっています。早く助けて下さい。」

と駆け寄ってきた。場所を確認すると指定場所と違う。

「間もなく後の救出班が来ます。待っていて下さい。」

と事情を説明し、後ろ髪を引かれる思いでその場を離れざるを得なかった。指定場所の家屋は、跡形もなく全壊しており、2名の方が生き埋めになっているとのことだった。12、3名の団員でまずスコップ、ジャッキ、鋸、その他の道具を使い、少しずつ慎重に土を掘り、柱を切っていった。荒い作業は決して許されない。緊張の2時間程が過ぎた時、おばあさんの身体の一部が見えてきた。そして、次第に顔が浮かび上がってきた。その時、平生あまり目立たない団員の一人が、

「長い間苦しかったね。今すぐ出して上げるね。」

と言って、顔にかかった土を手で丁寧に払い、額にタオルをかけているのを見て、思わず涙がこみ上げてきた。遺体を毛布にくるみ、近くの公民館に運んだ。次の救出活動にと思った時は、すっか

り日が暮れ、懐中電灯の明かりでは、とても救出できない。消防本部へ引き上げることを余儀なくされた。それからの救出活動は、消防署員と合同で、班を編成して行うことになる。一個の菓子パンを食べ、再び次の救出場所である苦楽園方面の現場へ出発。現場に着くが、救出要請の手違い等で、なかなか現場が分からない。気持ちは焦るばかりであったが、ようやく生き埋めになっている全壊家屋が判り、救出活動が始まる。寒さと余震の続く不安な状況のなかでの辛い作業、間もなく瓦礫の中から男性の生存が確認され、消防車で病院に運ぶ。その後、北夙川分署へ引き揚げ待機。ここで越木岩分団の団員から播間分団長さんが崩れた家の中から助け出されたが、死亡されていたと知らされた。改めて今回の震災の被害の大きさに胸の詰まる思いがした。近くにある越木岩会館周辺には、亡くなられた方が次々に運ばれてくる。まるで戦場のようで、とても言葉では言い表せない状況だった。一瞬にして家を失い、家族を失う様を目の当たりにし、地震の恐ろしさを思い知らされた。18、19日の救出活動に続き、給水活動、1ヶ月に及ぶ今回の活動は、私達消防団員が、今まで経験したことのない辛く厳しい大変な活動だった。しかし、団員が一丸となり、何日間も職業を忘れて活躍することができた。そして、このような苦しい悲しい災害現場での活動を通じ団員相互の絆が、より一層深まったと思う。

今回の消防団の活動を通じて、私は、第一線で少しでも被災者の皆様の役に立つことができる消防団員であったことを誇りに思っている。最後に、今後様々な災害が起こらないことを祈りつつ、今後も地元と密着した活動を心がけていきたいと思う。

人力と機械

越木岩分団副分団長 増澤 勇夫

悪夢の阪神淡路大震災が発生してから数カ月が過ぎ、倒壊家屋の解体も進み、何とか落ち着きが戻ってきた今日この頃、振り返れば1月17日午前5時46分、目が覚めようとしたまさにその時、淡路島北部を震源地とする震度7の大震災が発生。我が家でも人形ケース、筆筒、テレビ等が布団の上に倒れてきて、家の中はメチャクチャになり、真っ暗闇の中信じられないことが起こりました。

取る物もとりあえず、我が家から消防ガレージへ、団員も数名が駆けつけてくれた頃、地区住民からの救助の要請。直ちに消防車にて出動。桜町の家屋全壊生き埋め現場では、目の高さに2階建て家屋の屋根が見えるというその凄まじさは、一生忘れられない光景でした。あまりの現場のひどさに、どこから手を付ければよいのか分からない状態でした。しかし、ある知人が何か手伝いすることはないかと声をかけられ、とっさにユンボをお願いした。機械が到着、すぐさま屋根瓦、柱、梁の撤去、1時間あまりでやっと身体の一部が見え、ようやく救出できたと思った。すぐに近くにある北夙川分署へ運んで救急隊員に診てもらったが、救出したのもつかの間、何の返答もなくすでに息を引き取っておられ、本当に残念でならなかった。次から次へと救出要請。17日だけでも十数件の救出活動を行ったが、助かった人、亡くなられた方あつという間の一日でした。当地域だけでも30数名の方が亡くなられ、その中には、我が越木岩分団播間分団長も含まれておりました。その後、消防局に集合。まだまだ放置された倒壊家屋の支援など大変な数日間でした。この時ほど、機械のありがたさ、また、人間の無力さ、そして人間の心の温かさが分かったことはありませんでした。

その後の地域内の1ヶ月以上にわたる飲料水の給水活動など、当分団も日頃の訓練のお陰で団員一丸となり、諸活動をしたことが地域住民の安全

と分団の益々の団結をめざす一助にならないければならないと思った。

最後に、阪神淡路大震災で尊い命を亡くされた方々のご冥福をお祈りいたします。

1月17日その日その時

甲子園口分団副分団長 難波 洋三

その日、ダンプカー、ブルドーザーが走るような地鳴りの音で目を覚ました。横で寝ている妻に、「おい！地震や！」

とたたき起こし、布団の上に座ると同時に、

「ドンドンドン」

と激しい縦揺れ、身体を起こしかけている妻が飛んできた。（バッシャー）停電、暗闇の中に、閃光が3、4筋走る。どこかで電気がショートしたようだ。腰にしがみつく妻の頭を左手で抱え、右手は自分の頭を抱え、隣で寝ている息子（20歳）に、

「和樹、布団をかぶれ」

と声をかけるが、建物のきしむ音、家具の倒れる音、マンションのあちらこちらから女性の悲鳴・・・横揺れに身体が左に右に振り回される。

「何でこうなるんや！」

「負けてたまるか！」

「くそったれー！」

と大声を上げる。目の前に窓があり、いつの間にか2人とも向きが違っていった。

「和樹、大丈夫か、怪我ないか。」

「どうもない。」

と返事が返ってきた。

「ガスの元栓閉めろ！玄関あけろ！」

と言いながら、パジャマの上からズボンをはいた。いつもの夜中の火災出動と同じ動きである。時計を見て、窓の外を見ると、火力発電所の煙突、阪神高速湾岸線、天保山大橋のイルミネーションだけが瞬いている。何という不気味な静けさだろう。立花方面で火災か分からないが煙が見える。風は

ないようだ。箆笥を乗り越え、懐中電灯を探すが、いつものところがない。諦めて立ち上がると、足に懐中電灯が当たった。玄関の方から和樹が、「西宮北口の方で火事や！煙が3本見える。」と言った。リビングの床が濡れている。数日後に分かったが、風呂の残り湯が激しい揺れで溢れたらしい。下駄箱を起し、長靴、ヘルメットを探しだし、やっと外に出られた。隣から、

「助けて！出られない。ドアが開かない。」と声がし、1、2の3で中からと外から押して引いてようやく開き、みんな無事に出てきた。600号室からドアをたたき音、又、

「1、2の3」で引っ張って開いた。あと1時間ぐらいすると夜が明けるから、それまで廊下にいる方がよいと言いついて残して6、7階の全室のドアをたたいて回る。

「助けてー！」

「中におばあちゃんがいて出られない。」内開きのドアで箆笥、本棚の下敷きになっているとのこと。幸い、ドアと天井の間にガラス窓がある。ガラスを割って中に入ることが出来た。既に、男手も大勢いたので、後は任せて分団車庫へと走った。30分ぐらい経過したかと思う。途中、外に出ている団員に

「行くぞ！」

と声をかけ、又、団員の両親の住んでいる家に立ち寄り、無事な顔、声を聞き安心する。消防車の赤色灯が見える。走る。走る。現在、分団長以下4名出動。他の団員の安否が心配。

西宮北口、夙川方面で5、6箇所火災が見えると報告。市内全域で倒壊家屋があると分団長から聞く。当分団地区内は甲子園口分団だけで対処しなければならないと覚悟する。倒壊家屋からの救出。1人、2人、1軒、2軒と廻っていく。知り合いの人から、難波さんこっちに来て、

「〇〇さんが2人まだ出てこない。」

と言われ、そちらへ向かう途中別の人から死にそうな人がいると手を引っ張られていく。路上に布団が2つ。1人は男性。

「ワシは大丈夫やからそっちをみてくれ。」もう1人は女性で顔色は悪い。呼んでも返事がない。すぐに応急手当をしなければならない。なにぶんにも経験不足。やらざるを得ない。聴診器を持った人が声を掛けながら走ってきてくれた。近くの耳鼻科の先生だ。よかった。心強い。消防団の研修でやった救急講習会を思い出しながら、軌道確保、先生が心臓マッサージをする。1、2、3、息をフーッと吹き込む。胸が膨らむ。1、2、3、フーッ、1、2、3、フーッ。胃液が上がってくる。思わずむせる。1、2、3、フーッ、何回しただろうか。その時先生が、

「駄目だ。もういい。しなくてよい・・・」残念でならなかった。

消防自動車で団員数名と甲子園口3丁目方面へ向かう。3丁目の現場は、梁の下敷きになった女性1名、家族の人が小さな鋸で梁を切っていた。隣の3階建ての屋上より、ロープで梁を引き上げる方法をとる。屋上に上がった人から、

「駅の北側で火事みたい。」

と教えてもらう。すぐに団員に消防自動車を回すように指示する。やがて救出し、家族の人が病院へ搬送した。直ちに火災現場へ向かう。JR甲子園口駅前のホーキビルが倒壊している。そのビル北側の店舗2軒が火災現場。既に防火水槽に部署し、3線放水していた。団員10数名出動している。防火水槽の水もなくなりつつある。スコップを持って近くの新堀川へ向かう。普段川底は15センチ位なのに、50センチにも水位が上がっていた。あとで分かったが、下流で川底が1メートルも上がり、自然のダムが出来ていた。ホーキビルは倒壊というよりも、爆弾が爆発したようで原形をとどめていない。倒壊した建物は、駅前ロータリーを乗り越え、向かい側の歩道にまで達していた。どこかに進入口がないかを見て回るが、丸腰の我々ではとうてい無理である。電話が不通のため、現況報告を自転車で瓦木消防署へ向かう。

「午前9時過ぎ現在、甲子園口地区、火災1件、倒壊家屋多数、甲子園口北町で7階建て雑居ビ

ルホーキビル倒壊、入居20世帯、入居人数不明、30名ぐらい中にいると思われます。」と報告。午後2時過ぎ、大型レッカー車が到着。その後すぐに自衛隊、警視庁レスキュー隊到着。火災現場のガスが止まらず、午後10時まで放水する。自衛隊と共に、ホーキビルの救出作業を午前2時まで行う。明朝7時より救助活動再開。その後1週間救出作業が続いた。

生存者 1名

死者 17名

大震災を思う

小松分団部長 樋口 貞雄

1月17日のこと、早朝座っていたときでした。突然揺れ始めて、今までの揺れと違ったので、すぐストーブの火を消す。座っていても身体が左右に揺れて座って居れず、身体を伏せていました。すると、家の中でもの凄い音がした。一瞬の出来事である。電気が切れて家の中は真っ暗。手探りで懐中電灯を出す。箆箆や食器棚が倒れて、上に置いてある物は落ちて、手の付けようのない有様でした。暫くして、マンションの入居者が来て、マンションに上がって北の方を見ると、尼崎の辺りで煙が3箇所出ているとのこと。又、甲子園の方で火事とのことで、早速出動し、現場についてホースを引いて消火栓を開けたが、水は出ない。地元の鳴尾北分団は、井戸を利用して放水していましたが、水量が少なく、水圧が低く、消火に手間がかかって思うように消火できませんでした。その最中に甲子園三番町に煙が上がり、すぐにそちらへ向かった。到着するも、川の水量が少ないので、近くのマンションの水槽を利用させてもらって消火に当たった。直ぐに小曽根分団も到着して2線で放水したが、水槽の水にも限界があり、止むを得ず水の少ない川を堰き止め、消防車を移動して放水する。現場は、文化住宅2階建てで、倒壊しているので、消火に手間取り、時間がか

かった。消火の終わった時点で各分団は、消防局本部に集結し、以後の指示を受けるようにと連絡を受けました。ひとまず詰所に帰り、服装を着替えて本部に向かった。

本部にて夙川方面の救出の指示を受ける。国道2号線は勿論他の道路は寸断と渋滞で走ることが出来ない。小松分団には、鳴尾消防署のレスキュー隊の方が乗車してくれましたので、車を誘導してもらって現場へと向かいました。到着してみると、2階が1階を押し潰しており、見るも無惨であった。中を見ると、柱や本棚の下で圧死しておられ、引き出すまでは、一つ一つ手作業で取り出すより他はない。漸くして救出が終わり、本部へ引き返すがこれが又大変であった。その後の指示で、救出作業に何カ所か行きましたが、現場は見るも無惨で、お気の毒という以外に言葉はありませんでした。

3日間の活動も終わり、4日目からは給水活動に移る。鳴尾浜の船着き場にて給水タンクに水を入れるも、道路の損傷と渋滞で一日に6回ほどしか往復できず、住民の方が並んでいても給水できない人もできて大変気の毒な思いをしました。分団の積載している給水タンクが、500リットルのものしか積載できず、急いで船着き場に到着しても給水船がいなくてきもあり、待つ時間が長く、無駄なときがあった。私たちは、一回でも多く給水できるよう努力したのですが、一日の時間にも限度があり、冬の日暮れは早く、一日の過ぎるのが早く感ずる毎日でした。

私事ですが、ガスも水も出ない毎日でしたが、風呂に入れなかったことがつらいと感じました。

今後このような悲惨なことの無いことをお祈りするばかりです。

阪神大震災について

今津分団班長 上嶋 隆男

平成7年1月17日（火）午前5時46分に発生し

た兵庫県南部地震（阪神大震災）は、予想を遥かに上回る大災害を都市にもたらした。被災の中心地である阪神間には、ビル、マンション、家屋等の倒壊、阪神高速道路が大音響と共に十数ヶ所落下した。

一般市民は、1月15日が成人式で休日。今津連合福祉会恒例の新年会が、株式会社大関の大会場で、市長様を始め多くの議員様の新年の挨拶の後、西宮商工会議所会頭長部文治郎氏のお言葉で、

「今年は亥年で何が起こるか分からないが、皆様しっかり頑張りましょう。」

とお話をされて終了しました。16日は振替休日、さあ17日から心機一転張り切って働こうと思った矢先のことである。約25秒の地震が収まって、外に出ると真っ暗で、国道43号線の自動車のヘッドライトだけが明かりでした。じっと見ていると、阪神高速道路の橋脚が折れて、高架道路が三重になって落下していました。すぐに服を着替えて、43号線の通りにある私の店に行ってみると、自動車、トラック、ワゴン車、クレーン車等三重衝突で、運転手は重傷でした。一人は即死、2人は大怪我です。この時に警官が来て、今は110番も何も通じないので、皆さん協力して助けてやってくださいとの事。そこで、戸板（コンパネ）に乗せて、2人の重傷者を通りがかりのワゴン車に頼んで協立病院へ警察官に乗ってもらって行きました。また、大勢の人が出てきて、毛布をかぶせたりしていました。私は消防団員ですので、すぐに今津分団に出動しました。出動すると、上甲子園の方で火災があるとのことで、火災現場へ急行しました。また、家屋の下敷きになった人の救出にあちこちと出ていましたので、一日はすぐに過ぎました。夜11時に帰宅しました。18日も早朝より、倒壊家屋の下敷きになっている行方不明者の救出に、今津地区、津門地区と終日全員出動です。19日は本部の指令により、消防局に集合して、消防局の指令通り、第1小隊より第5小隊に分かれて、今津分団は第5小隊に配属されて、消防局の小隊長以下3名と計15名の小隊で行動しました。第5

小隊は、津門川町の倒壊した6軒の文化住宅でした。下の真ん中で、昭和42年生まれの男性の死体を約2時間ほどかかって救出しました。また、屋敷町でも2遺体を、高木東町でも倒壊家屋の下敷きになった行方不明者を救出しました。20日からは本部の指令により、給水活動です。今津分団は、6班に分かれて、朝8時より夜9時まで消防自動車に給水タンクを積んで鳴尾浜、鯨池浄水場、甲子園浄水場等にて給水に行き、今津小学校を始め、今津連合福祉会の各町会に、1日10回から14回給水して回り、2月20日まで毎日給水活動を行いました。初めのうちは、何かと段取りが悪かったが、すぐに慣れて上手になってきました。町の人達も、一生に2度とない大震災にあって、人と人とのつながりや町々の付き合いもよくなったことと思います。また、今津分団の皆様は分団長を始め全員よく頑張ったと思います。

あれからの私は

鳴尾東分団班長 岡田 和泰

衛星放送の『百名山・雨飾山』だったと記憶しているが、未だかつて早朝のテレビを観たことのない妻と布団の中で目覚めた私の会話が途切れたとき、突然揺れだした。一目散に玄関に飛び出し、家族を大声で呼び出すが、なかなか出てこない。玄関口で立ってられない揺れを感じる時間の長さが身体に染みついて離れない。家族の無事と家屋はそのまま壊れていないのが暗闇の中でぼんやりと判ったのは、その直後だったのだろう。すぐ隣近所の安否を気遣って大声で確かめあう。玄関の扉が動かず、閉じこめられている人がいるのか確かめている時に地面から吹き上げる水に気が付いた。みるみる間に水浸しがアッという間に拡がった。液状化現象だと判るのにそう時間はかからなかったが、とにかく恐ろしいことが起こったものだ。比較的冷静でおられたのも目覚めていたのが幸いしたのであろう。それにしてもゴツイ地震

だった。震源がまさか神戸・淡路だったと聞いたのはずいぶん後だったような気がする。

既に水道・ガスは止まってしまっている。程なくして消防団の出動要請を受ける。液状化した泥の中をバイクで駆けつけてきた副分団長の後ろ姿を見送って、直ぐ刺し子の法被に身支度を整えて家を出たのが地震後何時間ほど経っていたのか全く記憶にない。何処をどう走ったのかそれも覚えていない。日頃の消防業務は、市民の生命と財産を守るといった訓辞を何度も聞いているので、本能的にその行動の中に自分がいるのが不思議なくらい自然だった。道路はガタガタ、ガスの臭いが充満し、屋根瓦が落ちて散乱している。人・人・人はどの顔も恐ろしさのあまりこわばっているように見える。やがて、倒壊家屋の現場に着いた。その中に閉じこめられている人がいる。すでにその区域の消防団が懸命に掘り出し作業をしている。人海戦術しか持ち合わせていない消防団は、本来火災の消火が本務なのだが、生命と財産を守るにぴったりした行動で、それぞれが全力で生き埋めされている人命を一刻も早く探し出したい気持ちで一杯だったと思う。やがて一人の方を窮屈な消防車に乗せ、抱きかかえるようにして兵庫医大に運ぶ。まだ温かい体温が伝わってくるので助かればいいのにと念じつつ医師の診断を受ける。紫斑が現れてダメだと言う。そして、再び別の現場に急行する。一人住まいの若い女性の髪と右手が見えるが、機動力に乏しい我々には大きな梁は無情にも立ちはだかり、時間ばかりが飛んでいくように思える。この女性は、大阪大学に留学されている上海出身の衛紅さんで、数日後新聞に皇后陛下の訪中時に通訳をなさった方だと知り、異国で災難に遭われた無念さが伝わってくるような複雑な気持ちが全身に揺れ動き、自分でもハッキリ意識の中で、

「会社に出なくてもいい……。もっと人命救助に尽くそう……。」

「尽くしなさい。」

と命令されているもう一人の岡田の存在を知った

のは、1月17日の午後夕暮れに近かった。

「仕事は仲間がやってくれる。」

そうも思ったし、

「三菱電機の大きな組織が俺の甘えを受け止めてくれるだろう。」

と自分一人で判断してしまった。

再び戦場へ向かい、戸板に縛り付け病院にサイレンをけたたましく鳴らして急行する。そして、徐々に西宮市の中部地域へ出掛ける。もう、そこは地獄絵図そのままの地域で、ただ生存者を求め、大きな声で連呼して一軒一軒暗闇の中を走り廻った。途中で小さな冷たいおにぎりを一個食べたのを覚えているが、

「腹が減っているのは私達だけではないんだ……。」

と自分に言い聞かせて、次の日になってずいぶん経った頃、傾いているであろう我が家に帰った。

「ご苦労さん。」

と言って迎えてくれた家族のあることを率直に喜んで、即席うどんを一杯食べた（実際には殆ど食べることができなかった）。そして、夜が明けて再び捜索が続いた。自衛隊や機動隊が次々と国道2号線を西下して行く（行くと言うより目の前で止まったきり動いていない）。そんな中にマイカーで見物に行くのであろうか、野次馬が見受けられ拳に力が入ったりしたが、どうにもならないことに気付く。報道写真でも紹介された倒壊したNマンションの前の道路を何度も行き来したり、瓦礫と化した閑静な住宅街をまた一人と運び出しては現場へ急行する。3日目にして、その午後機動隊（愛知県）と合同で文化住宅の倒壊現場で一人の遺体を運び出した。

既に、自衛隊や機動隊が各地に配置されつつあり、我々消防団員はライフラインの一つとされる給水作業に4日目から携わることになる。給水タンクは、消防車に乗せられる範囲の小さなものであり、何度も何度も瓦礫の住宅地から給水船の停泊する鳴尾浜を往復するのが日課となる。長期戦の構えで、団員の分担日が決められるが、小さな

子供がペットボトルを持って水をもらいに来る顔が浮かんで、明日も出勤しましょうと自然に自分の口から「YES」の返事をしてしまった。これは何だろうか。やっぱり、全ての人があの惨事に遭遇し、生命と財産を失った多くの人達を思い出しては、きっと理解してくれるのは、自分の身近にいる職場の仲間達であろう。そして、家族もその中にいる。

さて、今度の大地震で教訓として受け止められた幾つかのことについても触れなければならない。まず第1に、我が分団の若い隊員の献身的な行動を讃えなければならない。まだ、入団して日の浅い団員で、正確には昨年末の入団で、消防業務は何も知らない若武者である。消防と言えば、消火が本務で筒先一つ持ったことのない者が、いきなり不慮の災いを受けられた御仏との対面である。胸中いかに察するにあまりある。震えながらの活動（そう見えた）には、ただただ頭が下がる。そのT君・K君には、生命と財産を守る大きなかけがえのない教訓を受けたことだろう。

第2に、我が団員には、職業柄専門家（電気工事）がいて、そのS君・Y君などは倒壊家屋の中での活線（電気）にもビクともしないで突入でき、処理できる様は非常に心強い限りであった。

第3に、あんな時、丸腰（裸）軍団で機械力の乏しい人海戦術では、限界は非常に低レベルで情けない。危機管理の希薄さをさらけ出した消防組織ではなかったであろうか。生命と財産を守る訓辞が宙に浮いてしまった。そのためにも、一人の団員が提案するより先に、その決意は持たれているとは思うが、改めて申し上げたい。

「最低線の機械力を有事に備えていただければやってはおれないヨ」

と言いたくなる。地球の耳搔き（小型シャベル）とまでいいたいが、その議論はまたの機会としたい。いずれにしても、訓辞だけではなく、上長はこんな有事に備えて耳を傾けるチャンスだったかも知れない。幸い消防団員には、他に例を見ないスペシャル軍団が即時に結成できる強みを持って

いることを付け加えておきたい。

いずれにしても、5,500名を超える犠牲者の御霊に合掌。

震災体験記

名塩分団班長 大前 有三

1月15日、毎年恒例の名塩とんどの警戒と出初式そして消防旅行は北陸へ、雪の影響でほとんど見学のないまま次の日帰る。そして、1月17日の早朝、今までに経験した事のない揺れ、とっさに横にいる3歳の子をかばう。2階で寝ていて1階の父母が心配であったが、何ともなくやれやれ。停電のため、懐中電灯で家の中を見て回り、下駄箱が倒れた程度で、台所の食器類も少々割れたぐらいで済みまずは安心。

普段通り神戸市北区の会社へ行くが、176号線の信号は付いていないところがあり危険であった。しかし、北区は電気も正常で、テレビで神戸市の惨状や阪神高速道路高架部分の倒壊現場が映しだされ、これは大惨事だと思った。夕方家に帰る道は渋滞しており、抜け道でようやく家に着く。しかし、名塩はまだ停電で、ローソクを頼りに夕食の支度。余震が続き、その夜は家族全員1階で寝る。

1月18日、救助活動のため西宮市内へ向かう。自分らの班は、鉄骨2階建ての古いアパートで、2階部分が1階を押しつぶしており、助かった人に聞くと、駐車場の車が2階部分を止めて、その隙間から脱出したという。自分らの救出する部屋は、どうしようもない潰れ方で、床の方からボールなどを使い板をはずす。やがて、3歳の子供を遺体で運び出す。その奥に小さい手がかすかに動くのが見える。しかし、それ以上は自分らでは無理で、消防レスキュー隊を呼んでもらい、ジャッキなどを使い1歳の子供が無事救出される。その奥には、お母さんが子供をかばうような格好で、遺体となっていた。前夜まで助けてと言う声がし

ていたとかで、1歳の子供はお母さんのぬくもりで助かったのかもしれない。その後も消防車にタンクを乗せて給水活動を何日か行う。あれから5ヶ月、未だに仮設住宅が足りないとか瓦礫撤去や復興で道路の渋滞は続く。

6月に入り、祖母の米寿の祝いで実家の愛知県へ行き、おじさんやおばさんに人の命のあっけなさや強さを今回の地震で痛感したことをはなす。父から関東大震災が大正12年、それから36年後の昭和34年伊勢湾台風、そして、同じく36年後に阪神淡路大震災が起きたことを聞き、因縁的なことを感じる。自分は、伊勢湾台風の時小学2年生で、その被害の中に住んでいて、不幸中の幸いか屋根裏に逃げて水が天井下までしか浸からず助かったが、家の低いところの人は、家もろとも水没して死んだ人が多い。

消防団に入団して8年ほどになるが、火災出動がほとんどで、地震による出動は初めての経験。よく初期救助活動の遅れや混乱で犠牲者が増えたと云われるが、自分自身思うに、機械力があつたら少しは犠牲者が減ったように思う。災害は忘れた頃にやって来る。まさにその通りで、自然の恐ろしさは今回の地震でよく判ったと思う。いつかまた必ず災害はやって来る。その日のために、常日頃から災害訓練を行って備えることが大事であると思う。

最後に亡くなられた方のご冥福をお祈りして、その死を無駄にせず、教訓として今後も消防活動にいそしみたいと思います。

阪神大震災

建石分団団員 林 靖博

下から蹴り上げられて目が覚めた。揺れというよりも強烈な振動だった。身体の上にテレビが落ちてきて、壁際のステレオがゆっくりと前後に揺れながら倒れてきた。激しい振動と轟音が止むと不気味に静かになった。両親の寝ていた部屋がな

くなっているのに気づいてようやく声が出た。

「おーい！みんな大丈夫か」

半分残った2階からは兄と弟の声が帰ってきて、崩れた2階の下からは両親の声が返ってきた。何が起ったのか分からないまま、真っ暗な外に出て、崩れた2階を掘り起こしにかかった。

まず、ガラスで怪我をしないように靴を履き、庭にあったはずの鋸などの道具を探した。真っ暗でよく見えないので、駐車場から車を持ってきてヘッドライトで照らして作業をした。（後から考えると、どうやって車のキーを見つけたのか覚えていない）その時に、近所の家が軒並み潰れているのを見て、始めてうちだけの被害ではなく、大地震により他にも相当被害が出ていると思った。

「火は出てないか？」

家にあったはずの消火器を探していると、

「角の米屋から火が出ている！」

と誰かが叫んでいるのが聞こえたので走っていくと、崩れた瓦礫の間から僅かな火がチョロチョロと燃えていたので直ぐ消火した。やれやれと思って顔を上げると、目の前の阪神高速の橋脚が折れて傾いている。思わず足がすくんで動けなかった。

その向こうには煙が上がっていた。

「直ぐ消防に出なければ・・・」

と思ったが、まだ両親が家の下敷きになっているので行けなかった。顔はよく知らないが、近所の人達が手伝ってくれて、9時頃ようやく両親を助け出すことが出来た。続いて、隣のご主人も助け出すことが出来た。その頃になると、

「あの家の人は駄目だった。あそこも駄目だった。」

という声が聞こえるようになった。私が確認した人も数人あった。その時はなぜか自分でも不思議に思えるほど冷静で、特段の感情はわかかなかったし、焦りすらなかった。これからこの状況が何日も続くだろうということだけは気付いていた。

自宅の周りの状況が一段落したところで、やっと消防に出動した。その時には既に、分団で1件の火事を鎮火させるところだった。

「まだ、他に2～3件燃えているらしい」
との班長の言葉にいよいよ覚悟を決めた。火災現場は3件あったが、1台だけでは完全に消火しきれない。それに使える水も少ないので数時間おきに巡回して放水した。昼間は瓦礫に埋まった人を救助し、その後も数件の火災現場に出た。3日目には全身が筋肉痛の状態になったが、不思議と疲れたとは思わなかった。4日目に家族の様子を見に戻ったとき、数え切れないほどの遺体を見て、初めて涙が浮かんた。

私の1月17日

津門分団団員 平井 得晴

「ゴオー」という地鳴りとともに激しい揺れで目が覚め、地震だと思ふ間もなくタンスが私達夫婦の上に半分のっかかってきたと同時に、部屋の中の置物や仏壇がもの凄いい音をたてて倒れました。暗闇の中で、夫婦協力し起き出して一安心。隣の部屋から長男、長女が、

「お父さん、お母さん大丈夫？」
と言う声が聞こえ、一家無事であることを確認してホッとしました。

夜が明け、外に出て周りを見渡すと、隣接の家屋が倒壊し、私は、自分の目を疑い、

「この光景が夢であって欲しい。」
と思った矢先、倒壊した家の家族が、
「両親がまだ家の中にいる！」

という泣き叫ぶ声。私は、消防団員という使命感が働いたのでしょうか、自我を忘れ、隣近所の人達と一緒に約2時間ばかりで人命救助を行い、無事に救出できました。

平素は、同じ町とは云え顔を合わせたこともない若者達までが、急場の助けとは申せ、一丸となって救助する姿を見て、私は深く感銘し、人間の温かさや命の尊さについて改めて考えさせられました。

午後になって分団詰所に行ったが、消防車と団

員の姿はなく、一応待機していたところ、約1時間後に帰ってきたので、分団長に聞いてみると、

「津門西口町で家屋炎上、消火してきた」
との事。分団長以下私達消防団員は、その後消防本部で待機することになったのですが、午後4時過ぎ分団長が呼び出され、

「津門分団は今から上ヶ原へ家屋倒壊人命救助のため緊急出動。」

との指令。急遽上ヶ原へ向かう。向かう途中至る所で倒壊した建物等に塞がれ、迂回を余儀なくされ、現場へ着いたのは午後5時前でした。現場の倒壊した家屋を前に私は、

「あり得ない・・・」
の一言をつぶやきました。分団長以下団員全員が、大声で叫んだが被災者の応答がない。辺りは薄暗くなり、何の手だてもできず、やむを得ず引き返すしかありませんでした。本部での待機中、先ほどの悲惨な光景を思い浮かべると、何とも言えないやりきれない衝動に駆られました。午前3時頃、本部から

「解散、午前9時本部集合。」
との命令が下り、分団長からご苦労さんという労をねぎらう言葉があり、解散しました。
地震発生後、実に22時間が経っていた。

阪神大震災を振り返って

門戸分団団員 下村 治久

1月17日連休明け、普通ならば人々が今日からまた気を引き締めて仕事に取りかかろうと云う日です。私は、

「ドーン」
という大きな音（あるいは揺れ）そして家具が飛んでくる様子が目が覚めました。しかし、停電のため、辺りが真っ暗で全く状況が把握できませんでした。

「地震だ！」
とは判りましたが、今までに全く経験したことの

ない出来事にどう対処したらよいのか分かりませんでした。取りあえず、家族の無事を確認した後、外の様子を見に行きました。まだ辺りが暗い中でとても大変なことが起こったことは、一目瞭然でした。

「なぜ、私たちの町にこんなひどいことが起こったのだろう」

と思いつつも、

「早くこのことを世間に知らせ、適切な処置を取らなければ・・・」

と気持ちは焦るのですが、電話が全く通じず、どうしようもない状態でした。今にして思えば、連絡と云えば全て電話に頼っていること自体も考え直さなければいけないと思います。どうして良いのか分からないまま、テレビなどで情報を整理していくうちに、私たちの町だけでなく兵庫県南東部全体での大地震であり、特に神戸市では、火災による二次災害が広い範囲で発生していることを知り、地震が本当に恐ろしいことだと改めて認識しました。

それから3～4日間は、消防団員として倒壊家屋の中に生き埋めになっている人々の救出作業を行いました。自宅や親戚や仕事がとても気になりましたが、そんなことより

「一人でも多く救出したい」

という気持ちで一杯でした。一生懸命やったつもりですが、日が経つにつれ、あまりにもひどい現場が多くなってきて自分たちではどうしようもなく、とても悲しい気持ちになったのを覚えています。そんな中で、全国各地から消防隊や自衛隊の方々が応援に駆けつけてくれました。皆で役割分担をし、手探りの状況の中で作業を遂行しましたが、被災者の人々の中には、かなり感情的になっておられる方もおられ、

「自衛隊の出動が遅い。」

などと私たちに苦情を言われる方もおられました。私は、言われるとおり確かに

「もっと早く出動していれば・・・」

とか

「もっと効率よく作業につければ・・・」

とは感じましたが、関東方面から来た自衛隊の方々がトラックの荷台に20～30人薄い毛布にくるまり、朝一番に到着した現場を見たとき、

「きっと寒い中を一晩中この状態で来ていただけたのだな。」

と思い感謝の気持ちで一杯でした。

この震災を振り返って、私が感じたことは地震は天災であり、いつどこで発生するか分からないけれど、被災地を復興させるのは人間の力であり、人々の協力と理解が重大な要素だと思います。私たち被災地の人間は、一日も早い復興を願っているのですが、それが人間の力である限りまず自分たちが協力し努力することは皆分かっていると思います。世間では、

「被災者は、行政に甘えている。」

という言葉も出ているようですが、決してそんなことはありません。ただ、復興に関する方向性だけは行政の方でしっかり決めていただきたいと思っています。兵庫県という大きな船が遭難した場合、その船に乗る我々は、皆復興という港に向けて力を合わせてオールをこぎ続けるでしょう。しかし、その舵取りが間違っていれば、いつまで経っても港に着かないということになるのですから。

私は、そんな気持ちを込めてこの度の県議会議員、市議会議員の選挙に投票しました。その時改めて、自分自身の気持ちを再確認いたしました。

1995年1月17日（火）

午前5時46分阪神大震災起こる

上ヶ原分団団員 奥井 正信

ドーンと云う思いがけない音に一瞬頭をよぎったのは、どこかの家でガス爆発が起こったのか、それとも地震か何が起こったか分からないまま、家族が無事か声を掛け合い無事の確認をしたが、まだ外も暗くどのような状況になっているのかよく分かりませんでした。

近隣の家が倒れ、家の人が下敷きになっていると云って、あちこちの家の人々が助けを求めている。薄明かりの中、ぼんやり見えてきた風景は、地獄の如くとしか言い表すことさえ出来ず、“大変なことになった”という言葉しかなく、ただ逸る気持ちを抑え、父親の家に駆けつけると、家は半壊で怪我人もなくホッと安堵する暇もなく、学生の寄宿舎が全壊していたとのことで行ってみると、2階建ての寄宿舎が1階建てになっていた。

学生4人が生き埋めになっていると聞かされ、近所の人が個々に助け出そうと柱を取り除いていました。

「皆さん手を止めて聞いて下さい。」

と声を掛けても止めようとせず、これでは救出作業がはかどらないと思い、家に帰り消防団の制服を着用して現場に戻りました。人々は消防の方が来たと喜び、全員手を止めて私の話を聞いてくれました。まず、ここの寄宿舎の学生はいますかと尋ね、家屋の下敷きになっている学生の部屋はどこかと聞く。全員静かにして、一人一人に声を掛け居場所を確認し、怪我の状態を聞き重傷の人から皆一丸となって助け出しました。ガス管が破裂してガスの臭いが周囲に立ちこめていた。タオルを濡らしガス管に巻き、ガスの流出を止める人、バケツに水を張り、ガス管に巻いたタオルが乾くと水を掛ける人、電気ノコで柱を切り除く人、トラックに布団を敷き怪我人を病院まで運ぶ人等々、各自分担を決めたことが幸いしたのか仕事が早く進み、被災者を助けることが出来た。消防の服が、こんなに皆を勇気づけるとは自分自身驚きました。その後、近隣の倒壊家屋への訪問と亡くなられた方々の弔問に行き、一息ついたら周りも薄暗く、日も暮れかけておりました。

分団長の指示は、

- 1 上ヶ原の被害状況を把握して報告する事
- 2 近隣で声を掛け合って手助けをする事
- 3 何時でも連絡できる体制でいる事
- 4 日目には団本部から給水活動の指示があり、上ヶ原分団は3人が1組になって行動を開始した。

鯨池で水を汲み、病院、老人ホーム、集会所を優先的に配給しました。上ヶ原という町は、団地とマンションが多く、老人や身体の不自由な人はポリ容器20リットルの水が持てず家まで一緒に運んで行くこともしばしばありました。回数を重ねると足がだるく、手は抜けそうになり愚痴の一つも言いたくなりましたが、手を合わせて

「有り難う。有り難う。」

と目に涙を浮かべて御礼を言ってもらった。いくら疲れていても、“あの顔、あの姿”を思い出すと、身も心も初心に返り、分団員になって良かったと思う。なかには、車で水を汲みに行く途中、私達のところに来て水を汲み、

「明日は来ますか？いつも決まった時間に来て下さい」

と怒る人もいました。私達は、そういう人に笑顔で

「貴方は元気そうですね。車で水を汲みにこれるのでしたら学校まで行って下さい。この水は、ご老人や身体の不自由な方に配給しています。」

とはっきり言うと、謝って帰っていく人、文句を言って帰る人等色々な人がいます。

この度の地震で多くの犠牲者が出ましたが、私は消防団員の使命として、多くの人のため精一杯のことをしたと思っています。数千年に一度と言われる大震災で体験した事を今後の人生の糧に行きたいと思っています。

救助にあたって

下大市分団団員 岡島 豊

1月17日、家族の無事を確認した私は、分団の詰所へと向かいました。すでに数名の分団員が集まっていますが、地震の直後で、情報も少なく今まで考えもしなかった大惨事に正直戸惑っていました。集まった団員の間では、自宅の被害状況及び自宅周辺の被害状況の情報交換が行われ、被

害の増大が予想されたため、召集がかけられることになりましたが、停電のため通常のサイレンが使えず、消防車のサイレンが代用されました。

時を同じくして、近隣住民の方から家屋が倒壊し、住人が下敷きになっているとの通報があり、私たちは現場へと向かいました。薄暗い中、懐中電灯を片手に現場へ到着すると、家屋は、完全に崩壊し、2名が下敷きになっているとの事でした。家族の方は、懸命に下敷きになっている家族に声をかけて励ましていました。はっきりとした声で、「助けてくれ！」

という返事もあり、救出作業が始まりました。瓦礫の山を一つ一つ手作業で取り除く以外に方法はなく、家族の方と共に、3～4名で作業は行われ、時折声をかけ勇気づけながらの作業が続きました。辺りが明るくなってきた頃、近隣の方も作業に加わり、10名を超える人手になっていました。その介もあり、間もなく2人とも救出することができました。救出後、病院に搬送した時、この地震での被害が甚大であることを痛感し、恐怖を覚えしました。病院内はパニック状態で、処置室に入りきれない怪我をした方達が至るところで治療を受け、寝かされていました。この光景は、今でもはっきりと脳裏に焼き付き、おそらく一生忘れることはないと思います。続いて私は、救出作業が行われている次の現場に向かいました。現場では、同じく2名の方が下敷きになっていました。先の現場とは違い、家屋の2階部分がそのまま1階に乗っているため、身体が挟まった状態になっていた。中心になって作業を進めている分団員が、ジャッキが必要だという。しかし、ジャッキは車載の短いジャッキしかなく、試行錯誤を繰り返しながら、何とか身体を引き出せるだけの隙間が確保でき、無事に救出することができました。他の分団員の現場では、亡くなられた方がでていたという情報も入りました。また、住民の方からは、新たな現場の通報が次々に入ってきました。通報者も興奮しているため、言葉も荒くなりがちで、分団員とのやりとりが続く。限られた人数で、道具もな

く、技術も知識も少ない我々は、一箇所ずつこなし、生存が確認されている現場を優先し、救出していく以外為すすべがなかった。次の現場では、完全に身体が挟まった状態になっている。ほとんど意識がないようで緊急を要した。しかし、この現場では、車載ジャッキだけでは間に合わず、ジャッキの確保に走り、トラックの所有者からジャッキを借りてようやく救出することができた。意識がない状態のため、少しでも早く搬送しなければならないが、道路は車でごった返しているため、サイレンを鳴らし走るが渋滞して動かない。私は、焦りと腹立たしさが入り乱れていました。病院には、自家用車で搬送してくる人も多く、かなりの人がこの渋滞に歯痒い思いをしていたと思う。その後休む間もなく、救出、搬送そして次の現場に向かうという活動が繰り返されていました。この日の救出活動は、懐中電灯の灯りをたよりに午後8時過ぎまで続けられました。この日の最後の救出者は、70歳を超える一人暮らしのご老人でした。家屋は、完全に崩壊し、どこにいるのか全く見当もつかない状態で、瓦礫の取り除き作業を行っている、僅かなうめき声が聞こえてきた。少数で作業していたのが幸いしたのか、現場にいた全員の耳に入った。生存を確信した私たちは、少しでも早く助けなければと、応援を呼びに行き、懐中電灯の灯りの中、救出することができました。この日一日の救出者は11名で、うち遺体での救出は3名でした。救出活動を終え分団詰所に帰り、ようやく我に返ったような気がしました。まだ、気が張っているせいか、疲労感や空腹感は余り感じませんでした。この日一日の出来事が、頭の中を駆けめぐりましたが、現実として受け止めたくなかった。悪夢であってほしいとも思いました。しかし、現実はこのからの余震にも備えねば鳴らず、夜通しの警戒が続きました。

1月18日、昨日の反省からチェーンソーやジャッキなど必要な作業用具が確保され、救出作業に臨みました。受け持ち区域で、昨日手の付けられなかった現場で、自衛隊の救出活動を見守りながら

遺体の出されるのを待ちました。そして、遺体の搬送、病院には汚れた毛布で覆われた遺体が、床に何体も寝かされていました。病院内は、昨日のパニック状態が信じられないほど落ち着き払っている様に私の目には映り、なぜかほっとした気分になりました。幸い受け持ち区域では、火災の発生が1件もなく、救出活動も順調に終わったため、隣接する分団の応援に向かいました。まだ家屋の下敷きになっている現場がかなりあるとのことで、他の分団からも応援がきて救出作業が行われていましたが、どの現場も生存者はなく、遺体で出されていました。

翌日は、消防署との合同作業となり、かなり複雑な崩れ方をした家屋での作業となりましたが、懸命に作業を続け、ようやく遺体を出しました。この日を以て分団による救出作業は終わりました。

私は、自宅の倒壊が免れていたため、最初に倒壊現場に行ったとき、正直いって恐ろしかった。また、私たちは、今回運良く救出する側にまわっただけであり、今後は今回の教訓を生かした万全なる備えをしなければならないと思いました。救出作業を迅速に行うための作業工具の充実もその一つだと思います。今回工具の確保に手間取り、救出作業に支障を来した例が度々あったと思います。救出した後、数名の方が亡くなられたと聞きました。もう少し早く救出できていれば、助かっていたかも知れないと思うと悔しくてなりません。

最後に、残念ながら遺体での救出となった方々、また、この阪神大震災でお亡くなりになった多くの方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

震災体験記

高木分団団員 古塚 雅章

あれは、未だに信じられない1月17日午前5時46分、私は、自分の部屋に置いてある本棚のガラスが揺れる音で、

「地震だ！」

と思い、すぐに飛び起きて部屋の扉を開け、家族は大丈夫かと各部屋をのぞきに行こうとしたとき、まるで木の幹がおれたような音と

「ドッ・ドッ・ドッ」

と上下に突き上げられるような揺れを感じました。私は、勇気を出して、家族の部屋をまわり、全員無事なことを確認して、出口の確保と電気・ガスの元栓を閉めて、家族と共にまだ夜が明ける前の暗い外へ出た。少しして、近くの人声がするので行ってみると、家の中の人が閉じこめられているという事なので、瓦をめくり屋根を鋸で切って、3人がかりで救出した。また、少しすると、あちこちで人が閉じこめられているという事を知った。私は、近所の人達と一緒に、救助に回っていたとき、予想もしていなかったサイレンが鳴りっぱなしに鳴った。私は、顔をひきつらせながら詰所へと急いだ。倒壊した家の屋根を越えていくと、阪急電車の車庫に面した道沿いの家が燃えていた。消防車もすでに3台来ていたが、消火栓が地震で壊れていて、水が思うように出ず、川の水を上流から呼んできて、その水を吸い上げて消火するのに丸一日かかった。

次の日から、再び倒壊した家の中に

「取り残されている人はいないか？」

とチェックを入れながら回って、生き埋めになって亡くなった人を病院から公民館へ運んだ。夜になると、家の周りは気味悪く、泥棒が頻繁に出るようになり、かなりの被害が出ているということなので、我々消防団も三交代で、見回りを実施することとなった。睡眠も食事もあり取りずくに動き回っていたため、倒れないだろうかと思ったりもしたが、気が絶えず張っていたので、かろうじて一度も倒れることがなかった。

地震のため、食料、飲み物がなかなか手に入らず、手に入れるのが仕事同然のような日が続いた。

地震で水道管があちこちで壊れて水が出ないため、我々消防団で給水活動を行うことになり、1日1トンの水を10数回浄水場まで取りに往復した。道路渋滞が甚だしく、その上、倒壊した建物が、

道路を塞いでいるところがたくさんあり、給水活動が思うようにできなかったような気がする。

私は、阪神大震災が、

「夢であってくれ！」

と、1月17日の地震直後から何回心の中で思ったことか。一日も早く地震前の状態に戻るよう復興作業が進んでほしい。今は、毎日そう思いながら仕事をしています。このような体験はもうこりごりだ。

震災体験記

高木分団団員 古塚 正治

1月17日早朝、強い揺れが収まり、2階の窓を開けると外は土煙で真っ白だった。しばらくして霧が晴れると、家は半分に裂け、倒壊しているのが分かった。私たち夫婦、子供と父母は増築したところに寝ており、祖父母はその壊れた古い方にいる。慌てて1階に降り、助けようとするが寝室の上には直径30センチ以上の柱や瓦、土壁などが覆い被さっていた。呼んでも返事がない。少しづつ瓦礫を取り除くが、いっこうにはかどらなかった。やがて消防のサイレンが鳴った。しかし、2人を残しては行けなかった。近所の人の手を借りて外へ出せたのは昼近くで、既に亡くなっていた。持って行き場のない悔しさだけが残った。この後やっと消火活動に参加できた。2日、3日と放水が続くが、なかなか煙がおさまらない。続いて埋まったままの遺体を出す作業や安置場所への移動などを行った。1週間後、和歌山で祖父母の火葬をすることになり、暫く消防の活動ができなくなった。申し訳ない気持ちで一杯だった。その間みんなの働きにはとても感謝している。数日後、給水や夜間の警備などに参加したが、団員が団結し、町の人とも心のつながった活動ができたことは大変よかったと思う。団員それぞれが被災しているにもかかわらず、よくここまで頑張ったと思う。今後も皆力を合わせ、団長、副団長のもとで

消防活動を続けていきたい。

阪神大震災に思う

小曾根分団団員 宮田 良浩

まず冒頭に、この度の震災により不幸にも犠牲となってお亡くなりになられました方々には心よりご冥福をお祈り申し上げます。そして、被災されました方々に心よりお見舞いを申し上げます。誰もが予想もし得なかった突然の惨事が、これほどにも大きな被害に発展してしまった事は、単に地震の大きさだけではなく、様々な状況が重なった事実があると思いますが、消防団員として、地震の当日から今日まで、いくつか感じてきたことを少し述べてみたいと思います。

まず最初に、今回の地震で恐らく大半の方が感じられたのではないかと思います。全てのライフラインがストップしてしまった時、何よりも急を要したのは何と言っても「水」だったのではないのでしょうか。電気は懐中電灯などで多少の代用はききます。が、水だけはそれなくてはならないものです。事実、地震直後、スーパーやコンビニなどから食料と共に飲料が不足し、かなりあちらこちらと苦勞して確保されたのではないかと思います。ですが、水道が止まってしまったことで苦勞したのは、飲み水だけではなかったのです。ご存知の通り、その直後から西宮市内でもかなりの火災が発生していました。出勤要請があり、現場へ駆けつけたときには既にかなり炎上しており、直ぐ消火活動を開始するにも消火栓が断水で使いものになりません。先に到着していた分団と相談して、とりあえず近くのマンションの貯水槽を使って放水したのですが、水量に限りがあるため、鎮火するまでには至りません。漏れたガス管に引火し、時々「ボン」と音をたてて小さな爆発が起きます。いつ大きな爆発が起きるとも判らず、またいつその建物が炎と共に倒壊するかも判らない状態の中で無念にも放水の圧力が下がってきます。

「水利さえあれば消せるのに・・・」

これが一番最初に感じたことでした。普段消防団ではそれぞれの担当区域が決まっており、その区域内の水利については、消火栓を始め河川や学校のプールなどの場所を把握しているのですが、今回のような緊急時にはそれ以外の区域へも出動することがあり、その場その場で水利を確保しなければならないのです。それぞれがお互いのためにも、今一度身近の水利を確認し、例えば消火栓の上への違法駐車や河川の水量の確保など、町ぐるみでの取り組みも必要なのではないかと思うのです。もちろん、今後の復興にあたって、地下の防火用貯水槽など行政による整備も望まれるところですが。

次に感じたこととして、道路の渋滞がありました。当日、既に早い時間帯にどの道も車で溢れかえっていました。勿論、怪我人や急病人を病院へ搬送していた車もあったでしょう。電話も通じず、身内や親類の安否を確認するため、現地へ向かっていた車もあったでしょう。しかし、あんな状態の中で、あまりにも皆が車を使いすぎたとは言えないでしょうか。救急車や消防車など緊急車両がもっと早く現場に到着できていれば、命が救われた方がどれほどいたことでしょう。重傷にならず軽傷で済んだ方も沢山居られたかも知れません。あの日、市内の消防団は全て西宮消防本部に集結し、次々と入る119番通報で出動していったのですが、当然救急車があちらこちらへ出払っていましたので、当分団の車両も瓦礫の下になった方々の救命にかなりの件数出ていきましたが、現場へ向かうどの道もこの道もまるで駐車場のごとく渋滞していて、まるで身動きがとれませんでした。実際119番に通報しているのに、いつまで経っても来てくれないとイライラされた方は少なくないと思いますが、いくらサイレンを鳴らしてもマイクで叫んでも、バイクでさえ通れないようななか、はっきり言ってかなり苦労しました。到着してみたら、倒壊した建物の隙間から足の先だけが見えています。声を掛けても返事がなく、その足は既

に冷たくなっているのです。家族の人の悲痛な叫びに何と言って説明すればいいのか言葉を失います。もしかしたら、つい今まで生きていらっしやっただかも知れないと思うと、何とも言えない無念を感じました。そこにいと判っているながら、救い出せなかった無力さと苛立ちが交差する悔しい気持ちは、今思い出しても残念でなりません。ご近所の方々のご協力で

「この人は助け出しましたよ」

と言っていただけの現場では、ホッとする一瞬ですが、あるところでは

「今頃のこのこやって来ても、助かる訳ないでしょ！」

と言われたときは

「すぐに来たくても、道が混んでしまって来れないんだ！」

と心の中では悔しさを覚えつつも、かなりショックでした。さすがに地震の翌日からは、規制されていて緊急車優先になりましたが、この現実もそれぞれが「我先に」の気持ちを持たず、緊急時におけるモラルを再確認しなければならないのではないのでしょうか。ちなみに、午後11時頃に神戸へ向かうために来てくださった三重県下の消防車が、やっと西宮を通過されたような始末だったのです。

3番目には、通信手段でありました。停電のためにテレビによる情報収集が出来ず、電話もほとんど使いものにならないので、携帯ラジオだけが唯一情報を入手する手段でした。私は、趣味でアマチュア無線をしていますので、地震直後にハンディトランシーバーで友人に無事を知らせることが出来ました。又逆に、皆の安否を確認することもできました。その後に消防無線を傍受してみましたが、どれもこれも混乱しきっている様子がありありと感じられました。消防団の使用している消防車にも無線機が設置されていますが、受信するのみで電波を送信することは許されていないので、本部からの指令は確認できても、それに対して返事をする事が出来ないのです。こちらからの確認や連絡は、電話を使わなければならな

かった訳ですが、これがまたなかなか通じないために手間取りました。これはあくまでも私の個人的な見解に過ぎませんが、今後のためにも非常時の通信手段の充実を期待したいと思います。

さて、話は多少前後しますが、時間が経つにつれ消防団の活動は、給水活動に変わっていききました。消防車の後ろに給水タンクを載せ、それぞれの区域の給水を行いましたが、ここでもどれほど皆が「水」に困って居られたか改めて痛感する日々でした。初めのうちは、こちらも要領がつかめず、どこへどのように回ればいいのか暗中模索でしたが、事前にマイクで広報しておいて、そこへ集まっていた方法をとりました。最初は、広報しても車が消防車だけに、不思議そうに家の窓から覗いて居られましたが、何人かが来られるのを見て、慌てて走って来られる様子でした。出来るだけ毎日同じ時間に同じ場所へ行こうとスケジュールをたてましたが、鳴尾浜へ来てくださる給水船の時間によって多少のズレがあり、首を長くしてお待ちいただいていた方々が沢山居られたことと思います。特に、団地やマンションなど高層の建物の多い地区では、みるみる行列が出来るために一回の給水ではとても間に合わず、途中で汲みに戻るあの寒空の中にじっとお待ちいただいたこともしばしばありました。ですが、同じ時その寒空の中で船から1台1台に水を入れてくださった給水船の作業員の方々がおられたことを、改めてお伝えしておきたいのです。全国各地から何時間もかけて駆けつけ、休む間もなく給水していただいた有志の方々の善意がこもった「美味しい水」だったはずです。この場をお借りして改めて感謝申し上げたいと思います。

これから復興に当たっては、容易に解決できないことが多いでしょうが、この教訓を無駄にすることなく、今後は「全国のモデル都市西宮」にならなければなりません。それが生き残った我々がなすべき義務だと言っても過言ではないと思います。皆の協力ですばらしい西宮を再建していきましょう。

最後になりましたが、救援いただきました全国の沢山の皆様に心より厚くお礼を申し上げます。ご支援本当に有り難うございました。

震災体験記

名塩分団団員 谷野 義昭

阪神・淡路大震災の被害状況については今更私が申し述べるまでもなく、新聞・テレビ等のマスコミを通じて詳しく報道されているため省略するが、震災後私は、ある業界団体の罹災者に対しての相談を受け付けました。その中で、罹災された方々が言われるには、この震災の時ほど、地域社会において消防団を頼もしく思ったことはないと言っておられました。その方より詳しく聞くと、その人は70歳の老人で、震災直後自宅が崩壊し、その下で夫婦とも生き埋めになってしまったが、近くの消防団の人がすぐさま駆けつけてくれ、ガレキの中から助けてもらい、奥様は骨折のみで済み、直ちに消防自動車で病院に連れていってもらい一命を取り留めたとのことであった。近くに消防団の人がいなかったら、私達老夫婦はガレキの中で自衛隊その他の救出を待って、その間に死んでいたかも知れず、その後の避難所生活においても、消防団の方々が崩壊した自宅より生活に必要な物を取り出したりしてくれ、本当に感謝していると言われました。又、ある方は、店舗が全壊して茫然としていると、消防団の人が、

「火事その先で発生しているから必要な物を運び出せ」

と指示をしながら真っ先に商品の運び出しをやってくれたり、その他の団員の方は、水が出ないから近くの川を堰き止めて消火活動をしてもらったお陰でその方の店舗は燃えずに済み、震災後仮設店舗にて商売を再開することが出来ましたと言っておられました。この様に罹災された方々が、今まで消防団は年末警戒等だけをしており、その様な事は消防署に任せたらよいと思っていたが、今

回ほど消防団に感謝したことがないと認識を新たにしましたと言っておられました。私自身、消防団に籍を置き、震災後人の救出あるいは水の給水活動に出動いたしました。活動する場所が違って、同じ消防団の人がこの様に地域社会に密接に活動を致し、地域住民の方よりこのような災害の時ほど頼もしく思われ、頼りにされている現状を聞くにつれ、消防団員の一人であったことを喜びにまた誇りに思っております。

悲しみを乗り越えて 我が町を守った消防団員

西宮市市民総務課(消防団担当)係長 藤本 渉

この度の阪神・淡路大震災に際しまして、全国の消防団の皆様から西宮市消防団へ寄せられました温かいご支援・ご厚情に心から感謝申し上げます。また、震災に当たり、消火・救出活動に応援いただきました消防本部の皆様、震災後遠くから駆けつけていただきました各市町村職員の皆様をはじめ、全国各地から差しのべられましたまたご援助に対しまして謹んで御礼申し上げます。

お陰様で、6ヶ月経った今、ようやく落ち着きを取り戻し、避難者も一時は4万5千人を超えていましたが、千人を割るまでに減少し、倒壊家屋の取り除き作業も急ピッチで進められ、鉄道にいたっては新幹線、JR、阪急、阪神電鉄がようやく全線開通し、現在少しずつではありますが、復興に向けて着実に歩みはじめております。

1 西宮市の概要(平成7年4月1日現在)

- (1) 人 口 408,792人
- (2) 世帯数 157,563世帯
- (3) 面 積 99.85平方キロメートル

2 消防団の概要(平成7年4月1日現在)

- (1) 組 織 1団 1本部 33分団
- (2) 実 員 726人
- (3) 車両等 消防ポンプ自動車 38台
小型動力ポンプ 12台

3 被害の概況(最大時)

(1) 人的被害

死 者 1,058人
負 傷 者 6,386人
避 難 者 45,000人

(2) 建物被害

全 壊 32,593世帯
半 壊 27,276世帯

(3) 火 災

発生件数 41件
焼損棟数 90棟
焼損面積 7,784平方メートル

(4) 崖 崩 れ

696箇所

(5) 道路被害

国 道 2号線架橋損傷及び171号線門戸
高架橋落下

名神高速道路 1箇所落橋

阪神高速道路 3箇所落橋

私達が住む阪神地方は、大きな地震もなく、台風に関しては六甲山を控えているためか直撃が少なく、気温も温暖で過ごしやすかったです。特に、地震に関しては、活断層が走っていることなど聞かされたこともなく、これほど大きな地震が発生するとは誰も想像しておりませんでした。したがって私は、災害に関していつもマスメディアを介して情報を得る第三者の立場でばかり災害を見ていましたが、今回は何度頬を掴っても紛れもなく現実にマスメディアの中に登場する被害の当事者としての側の立場にいました。

平成7年1月8日(日)の西宮市消防出初式が、例年になく春を思わせるような暖かい日に挙行する事が出来、関係者一同喜ぶ反面余りの暖かさにこれは何かが起こる前兆ではないかと心配していた矢先の出来事でした。同月17日午前5時46分淡路島北部を震源地とするマグニチュード7.2の直下型地震「兵庫県南部地震」により、西宮市では壊滅的な被害を受けました。これは後に聞いた話ですが、ある新聞配達員が高台で新聞を配達していたところ、空が閃光により明るくなったかと思

うと、西から“巨大な地上波”が建物をなぎ倒して襲ってきたので、その場にひれ伏したということでした。

私自身、大きな揺れで起こされ、その後突き上げるような縦揺れを感じ、家が壊れたのではないかと思ったほどでした。その時はライフラインの全てが止まっていたため、何がなんだか分からず、とりあえず懐中電灯を探して家族の者とともに外へ出て、車のラジオをつけました。すると、震源地は淡路島北部、震度は6と伝えていましたが、まだ寒かったため、暫く車の中で暖をとっていました。30分ほどすると白けてきたので、家へ戻ってみると、食器棚は倒れて食器が粉々に割れており、東西に向けて置いていた和簞笥、洋服タンスが全て倒れていました。すぐに電気だけは復旧したので、テレビを付けてみましたが、情報不足のためか被害状況、交通情報が殆ど流れず、どのような状況になっているのか判断することもできませんでした。宝塚市の私が住んでいる地域は、比較的被害が少なかったため、西宮市の被害がこれほど大きくなっているとは思っていませんでした。

その後、普通ならば車で30分程度で行ける道を2時間以上かけて西宮へ着きましたが、中心部に近づくにつれ、道路は陥没し、ビルは傾き、家屋はペシャンコに潰れており、災害の大きさが明らかになってくるにつけ、これが本当にあの「文教住宅都市」西宮市なのかと目を疑うほどでした。市役所へ向かう途中、消防団の車がサイレンを鳴らして負傷者を病院へ搬送しているのが見え、地元で根ざした消防団の活躍を非常に頼もしく感じました。

西宮市では、消防団の事務を市長部局の市民局で執っています。市役所へ着いてみると、交通機関の途絶等により、職員もそれほど集まっておらず、職場のドアを開けると、2メートル角の厚さは1.5センチはあると思われる窓ガラスが割れ、コンクリート壁には多くのクラックが入り、その隙間から外が見える程でした。私の机の後ろに

あった本棚はガラスが割れて倒れ、机もドア付近まで移動して中へ入れる状態ではなく、市役所付近の揺れのすごかったことが想像され、もしも、勤務時間中にこの地震が起きたことを想像すると背筋がぞっとする思いでした。しかし、何をするにも中に入り、散乱している物を片づけねばと思い、何人かの応援を得て片づけた頃に、分団からひっきりなしに電話が掛かるようになりました。電話は輻輳して掛かりにくくなっていましたが、分団備付けの電話は緊急用に指定されていたため、分団からの連絡はよく掛かり、その日は、分団から

「災害現場は人力だけで救出できないため重機を回して欲しい」

とか

「ガス漏れがしているので関係機関へ連絡を取って欲しい」

といった情報を災害対策本部へ伝えるのに追われました。そうしているうちに、木嶋団長と会うことができたが、団長は早くから出ておられ、団本部の部屋を開けたが中へ入れなかったため、市内の被害状況を確認めながら、出動している分団に対し現場が一段落すれば消防局に集合するよう指示するとともに、比較的被害の少なかった山口、塩瀬地区の分団を消防局に集め、消防局の指揮下で行動をとるよう指令を出されたとのことでした。この団長の適切な指示により、各分団は自分の受持区域だけでなく、市全体の救助活動に従事することになり、72時間がタイムリミットといわれる救出活動において、3日間で倒壊家屋の下敷きになっている殆どの人を救出することができました。しかし、被災者でもある消防団員に対し、出動するよう心を鬼にして命じたことが、団長の心に深い苦しみを与えたようでした。

夕方になり、次第に被害の大きい地域も分かってきましたが、消防団員が飲まず食わずで出動しているため、団員の食糧確保が急務となりました。団長、副団長らの計らいで、被害の少なかった山口、塩瀬地区へ炊き出しを頼み、おにぎりを600

個ほど持ってきてもらい、午後7時頃出勤者全員に配りましたが、当日は約570人の消防団員が出ていましたので、団員達がその日に食べ物を口にできたのは、おにぎり1個だけで、空腹を満たすには十分ではありませんでした。しかし、消防団員は一言の不平も言わずに、その後の消火、救出活動に頑張ってくれました。そして深夜には、各分団に18日の集合時間・場所について連絡を取るとともに、明け方までかかって当日の各分団の出動場所を地図に被害状況を付けて作成しました。この間、市役所北を走る国道2号線を他市の消防自動車がかきりにサイレンを鳴らして西へ走っていましたが、どの車として西宮市に止まってくれた車はなかったように記憶しています。

このようにして、あの忌まわしい一日はあわただしく過ぎて行きましたが、消防団員は、自宅、家族が被害を受けているにもかかわらず、地震発生とともに、自発的にそれぞれの分団車庫に集まり、消火、救助、負傷者の搬送、火災予防広報等の作業に率先して従事し、また、その後1ヶ月にわたり、市内の断水地域を細かく回って給水活動を続けるなど、消防団員の活躍は目を見張るものがありました。

以下に、震災後1ヶ月余りに及ぶ消防団の活動を紹介します。

① 消火活動について

市内における火災は、地震発生から3日間で41件に上りましたが、このうち、消防団のみで消火に当たり、延焼拡大を防止したのが半数以上の23件に及びました。断水により、消火栓は使用できませんでしたが、各分団は、河川、農業用水を倒壊家屋の瓦礫等でせき止めるなどして消火に努め、大規模な延焼拡大を防止しました。震災約1時間後には、市内の至る所で火災が発生し、なかでも、市内広田町1番の文化住宅で発生した火災は、18棟1,451平方メートルを全焼し、鎮火まで9時間を要するという震災後の火災のうちでは一番大きい火災となりました。火災発生と同時に近くに住む団員が、煙を

発見して消防自動車で駆けつけましたが、同時発生した他の火災により応援部隊は到着せず、消防団の1車両で消火に当たらねばなりません。当初は、現場南のマンションの防火水槽から取水し消火にあたっていました。水利から火災現場へホースを延ばすには国道171号線が横切っており、そこを走行する自動車でもホースが破られるため、分団長の指示により、団員はその下を流れる御手洗川へホースを持って飛び込み、橋の下を通して懸命の消火作業にあたりました。しかし、火勢はいっこうに衰える気配をみせず、防火水槽もすぐに底をついたため、昨年の渇水対策時の消火活動用に積んでいた土嚢に、近くにあった瓦礫・植木鉢等を入れて川へ放り込むことにより川を堰き止め、延焼防止拠点を定めた効果的な消火に努め、大規模な延焼拡大を回避することができました。消火活動は残火処理を含めると延々16時間に及び、その間自動車の燃料もなくなりましたが、灯油で代用するなど機転を利かし消火に努めた結果、1台の消防車両では被害を最小限に食い止めることができました。また、同時刻に高木西町5番で9棟690平方メートル、門戸岡田町1番で1棟110平方メートルを全半焼する火災が発生しましたが、これにもその地域を管轄する分団が直ちに駆けつけ、近くの農業用水、四十谷川を倒壊家屋の瓦礫等で堰き止めるなどして消火にあたり、延焼拡大を防止しました。

② 救助活動について

同時多発の倒壊現場から要救助者を生存救出するには、災害発生から72時間がタイムリミットであるとの危機感から、消防団員は、瓦礫の山と化した災害現場で、倒壊家屋の下敷きとなった市民の救出、負傷者等の病院等への搬送を、文字どおり不眠不休で救助活動にあたりました。地震発生と同時に消防団員は、「自分たちの町は自分たちで守る」という使命感に燃え、倒壊現場で懸命の救助活動を続けました。救助活動を行っている際にも、大きな余震は続いて

いましたが、団員は身の危険を顧みず、潰れた家の梁等の下敷きとなっている被災者を、チェーンソー・バール等を用いて1人、2人と救出していきました。これら消防職・団員の必死の救助活動により、全救出者658人のうち、大規模倒壊現場を除いて3日間で、倒壊家屋の下敷きとなっていた殆どに当たる653人を救出することができました。

③ 給水活動について

地震直後、ライフラインである電気、ガス、水道は市内全域にわたって停止し、電気はすぐに復旧したが、水道とガスは1ヶ月半から3ヶ月にわたり停止しました。特に、断水による影響は大きく、飲料水、下水処理といった生活面での不自由を余儀なくされました。そこで消防団は、市水道局の給水活動を補うため、消火・救出活動の一段落した1月20日からは消防自動車に給水タンクを積んで給水活動を行いました。水道局の行う給水活動は、給水車を小学校等の要所に据えての給水であったため、被災者が給水を受けるには、ポリ容器等を持参して遠い給水所まで行かねばなりません。しかし、消防団では38台の消防自動車に500リットル～1トンの給水タンクを積み、浄水場でタンクを一杯にした後、断水している地域を細かく回って給水活動を実施したため、重いポリ容器を運ばねばならない老人や婦人から大いに感謝されました。給水活動は、水道がほぼ復旧する1ヶ月間に及びましたが、その間幾度となく、市民から消防団に対して給水要請があり、延べ567台2,191人が朝早くから夜遅くまで給水活動に携わりました。この給水活動は、半数以上の消防団員の家屋が全半壊の被害を受けていることに加え、団員の疲労も連日の出動で限界に達していたことを考慮して取られた措置でしたが、市民から消防団の活動に対して大いに感謝されたところです。

このように、消防団が震災後即座に出動し、被害を最小限に食い止めることができましたのは、

消防団員の自分たちの町は自分たちで守るという郷土防災の意識が高かったことに加え、その家族が消防団員という立場をよく理解して出動させてくれた結果であると私は信じています。

阪神・淡路大震災以後、日本をはじめ世界各地で大きな地震が起き、地球全体が地震の活動期に入ったような気もしますが、今回の震災を教訓として、様々な角度から分析し、今後の災害に即応できる体制を早期に確立することが、亡くなられた方に対する御供養であり、防災に強い町づくりを推進することが、全国の皆様から寄せられましたご支援に報いることであると信じ精一杯頑張りたいと思います。

最後になりましたが、この度の震災で尊い命を亡くされた5,500名を超える犠牲者に対しまして、心からご冥福をお祈り申し上げます。